

東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて第3回シンポジウム

開催日時：2012年7月11日（水）13時～17時

開催場所：京都大学稲盛財団記念館3階大会議室

「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」第3回シンポジウム開催に当たって 挨拶

みなさま、こんにちは。

本日は、京都大学こころの未来研究センターで行なっている研究プロジェクト「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて」の第3回目の研究集会を行ないます。

本日は、ご参加、まことにありがとうございます。4時間という短い時間の枠内ですが、実のある議論ができれば幸いです。ご協力、お願い申し上げます。

第1回目のシンポジウムは2011年7月20日震災後の活動や状況分析を中心に、第2回目は2012年1月24日に宗教的世直し思想と仙台の「心の相談室」の活動報告を中心に行ない、その際の発表と議論の内容はすべてこころの未来研究センターのHPに掲載してありますので、ご一読くだされば幸いです。アドレスは、

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/eqmirai/index.html>

から入って、PDFファイルを読むことができます。

http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/eqmirai/2011/07/post_9.html

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/eqmirai/2012/01/2.html>

さて本日は、これらに続く第3回目のシンポジウムになりますが、この間に、東日本大震災に関連して、本研究プロジェクト連携研究員の大阪大学大学院准教授・稲場圭信氏が『利他主義と宗教』（弘文堂、2011年11月）を、玄侑宗久氏が『無常という力「方丈記」に学ぶ心の在り方』（新潮社、2011年11月）と『福島に生きる』（双葉新書、双葉社、2011年11月）と『地蔵のこころ、日本人のちから』（佼成出版社、2012年1月）を、鎌田が『現代神道論——霊性と生態智の探究』（春秋社、2011年11月）を、また玄侑宗久氏と鎌田が共著で『原子力と宗教』（対談、角川 one テーマ新書、角川学芸出版、2012年3月）を、島園進氏が『日本人の死生観を読む——明治武士道から「おくりびと」へ』（朝日選書、朝日新聞出版、2012年2月）などを出版しています。個別にみれば、連携研究員のみなさんがさらにたくさんの論考やエッセイや対談などを雑誌などでも発表してきています。

本日はそれらを踏まえて、東日本大震災後の1年間の出来事や活動を振り返りつつ、確認・整理・未来展望をしていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

わたし自身は、写真家の須田郡司氏とともに、2012年5月に第1回目の被災地訪問（約400キロ）、6月に福島県相馬市での100日慰霊祭参列、10月にまったく同じ場所を第2回目の訪問（その際、近藤高弘氏制作の「命のウツワ」を届ける）、11月に「命をウツワ」を福島県相馬市の仮設寺清水寺（本寺は浪江町）に届け、そして2012年5月には、さらに被災地沿岸部訪問を拡大して青森県八戸市から福島県南相馬市と浪江町との立ち入り禁止区域の境まで約900キロを巡りました。その時の見聞の一端は、「モノ学・感覚価値研究会」のHP：<http://homepage2.nifty.com/mono-gaku/>の「研究問答」欄に掲載しています。

昨年5月に訪問した寺社などを黒崎浩行氏が以下のように整理してくれました。

施設名	県	住所	状態
浪分神社	宮城県	仙台市若林区霞目 2-15	無事
鼻節神社	宮城県	宮城郡七ヶ浜町花渕浜 誰道 1	ほぼ無事
志波彦神社・鹽竈神社	宮城県	塩竈市一森山 1-1	灯籠八基が倒壊、一基が半壊、十基が損傷、社務所壁が三カ所落下、石鳥居が傾斜、玉垣七十五カ所が倒壊、鉄製灯籠二基が倒壊、六カ所で石壁が突出、石段九カ所がずれ、石仏四カ所が傾斜、社務所内階段が傾斜。
立正佼成会 石巻教会	宮城県	宮城県石巻市駅前北通り 3-10-30	インフラの状況：水道、電気、ガス、テレビ、固定電話・FAXなどがストップ。次第に復旧。
葉山神社	宮城県	石巻市雄勝町大浜字大浜 9	社殿全壊、末社・社務所・釣鐘堂流失、鳥居二基・灯籠・石碑倒壊。
石神社	宮城県	石巻市雄勝町大浜字石峯 大久保山 1	津波により流出。
釣石神社	宮城県	石巻市北上町十三浜字追波 305	社務所流出全壊
宝鏡寺	宮城県	気仙沼市川原崎 3 1	無事
金光教 気仙沼教会	宮城県	宮城県気仙沼市南町 1 丁目 2-1 5	無事・救済拠点・避難所
紫神社	宮城県	気仙沼市浜見山 1-1	避難所 200人
慈恩寺	岩手県	陸前高田市広田町字泊 53	避難者数 500人(2011/4/22)、536人(2011/5/10)
愛宕神社	岩手県	九戸郡野田村 2 6 - 3 5	無事
相馬中村神社	福島県	相馬市中村字北町 140・ 141	社務所の授与所内散乱、石灯籠倒壊。／神社隣の長友公園で6月18日、「東日本大復興祈願並び犠牲者

慰霊大採燈祭」が行われた。

これらのほとんどの寺社をこの1年半弱で3回ないし4回訪問しつつ、渡り鳥のように、あるいは遍路のように、時期を定めて定点観測するように追跡調査をしてきました。その過程で、宮城県石巻市の雄勝法印神楽の復興支援に少しですが協力してまいりました。本日15時過ぎに、その雄勝法印神楽のリーダーである伊藤博夫会長さんたちがこの場に来られる予定です。そこで、この間の経緯など少し話していただこうと思っております。

実は、昨日、7月10日から13日まで、石巻市立雄勝中学校と石巻市立大須中学校が京都へ修学旅行に来ているのです。その大須中学校の生徒に同行して、雄勝法印神楽の伊藤博夫会長をはじめとする神楽師3名がともに京都入りしました。そして本日の朝9時から12時まで京都市立開晴小中学校との神楽上演を含む交流があり（わたしも見学しました）、そのあと生徒たちは午後3時から京大博物館を訪問するスケジュールですが、その時間帯に伊藤博夫会長さんたちがこちらに来てくれることになっています。

このプロジェクトは、昨年、甚大な被害を受けて修学旅行が取りやめとなった石巻市立雄勝中学校を支援するために始められたもので、雄勝・大須の両中学校がいずれ統合することが決定したため、今年は二校で修学旅行を実施し、大須中学校の生徒らが神楽を学んでいるために、師匠方も同行したとのことで、これらは協賛金や寄付金で実施している事業のようです。そして、このコーディネートをしているのが、文部科学省の社会教育アドバイザーであり、石巻市の被災校のキャリア教育コーディネーターの石川さんです。昨夜、石川さんからのメール連絡で急遽そのような形になりました。

本年5月5日、わたしは國學院大学の黒崎浩行さんや須田郡司さんと一緒に、大須中学校のある雄勝町の大須八幡神社で奉納された雄勝法印神楽を見学してきました。その大須中学校の生徒たちの修学旅行と本シンポジウムが鉢合わせするとはなんとという有難い縁組でしょうか！

東日本大震災から1年4ヶ月、その間に起こった事柄はさまざま、日本社会も混乱と混迷の中にあるかに見えますが、そうした中で着実に「こころの未来」を構想し、切り拓こうとする歩みもあると確信します。本日は4時間という短い時間の中ですが、本研究プロジェクトの連携研究員諸氏とともに虚心坦懐に議論できれば幸いです。なにとぞよろしくお願いいたします。

2012年7月11日 鎌田東二拝

*なお、シンポジウム会場の後ろ奥で、津波で大きな被害を受けた岩手県大槌町の第 9 仮設住宅に住む主婦たちの手芸グループ「はらんこ」のメンバーによる手芸品を販売しています。第 2 回目のシンポジウムの中から支援活動の一つとして委託販売をしております。ご支援いただけると幸いです。

また、こころの未来研究センターで開催したシンポジウムの記録を単行本化した書籍も特別割引価格で何種類か置いてありますので、ご覧ください。

プログラム

趣旨説明 鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授・宗教哲学・民俗学）10分

基調報告 1：玄侑宗久（作家・福島県三春市福聚寺住職）「福島の現在と宗教の役割と課題」40分

基調報告 2：島菌進（東京大学教授・宗教学・死生学）「宗教者災害支援連絡会の活動 15ヶ月を振り返って」30分

コメンテーター：稲場圭信（大阪大学准教授・宗教社会学）10分

休憩 15分

報告 1：黒崎浩行（國學院大学准教授・宗教学・神社研究）「被災地の神社と復興の過程」25分

報告 2：一条真也（本名：佐久間庸和：株式会社サンレー社長・北陸学園大学客員教授）「東日本大震災とグリーフケアについて」25分

コメンテーター：井上ウィマラ（高野山大学准教授・スピリチュアルケア学）10分

コメンテーター：鈴木岩弓（東北大学教授・宗教民俗学）10分

ディスカッション・総合討論 60分

第1部

（ほら貝奉奏）

趣旨説明 鎌田東二

皆さま、こんにちは。こころの未来研究センターの鎌田東二と申します。今日は2012年7月11日です。昨年3月11日に東日本大震災が起こってから、ちょうど1年4か月になります。午後2時46分には、皆さまと一緒に黙祷をささげたいと思いますので、その時間になりましたら、起立して黙祷したいと思います。

開催に当たりまして、本シンポジウムの趣旨説明をさせていただきます。ちょうど1年前、2011年7月20日に「災害と宗教と『心のケア』」というテーマで、第1回目のシンポジウムを行いました。

そして、第2回目は、2012年1月24日に半公開の研究会のかたちで、少人数で宗教的

世直し思想をテーマにした議論を行いました。その際、宗教民俗学専攻の鈴木岩弓東北大学教授に、仙台で展開されている心の相談室や Cafe de Monk (カフェ・デ・モンク) の活動について紹介してもらいながら議論を深めていきました。

そして今日、第 3 回目のシンポジウムとなります。このような一般公開のシンポジウムは 1 年に 1 回、できれば、7 月「11 日」という節目の日に、今後とも続けていければと考えております。

第 1 回目のシンポジウムの際に、この研究プロジェクトの全体的な紹介を致しましたので、ここではそれを繰り返すことは致しません。その際の議論は、こころの未来研究センターのホームページ上にすべて公開されておりますので、議論の内容をご確認いただければ幸いです。

ここでは、昨年からのような展開になっていったのかの話をしておきたいと思います。

去年の 7 月 20 日の第 1 回目のシンポジウムの後、京都新聞が事後報道してくれました。その後、私たちは 2011 年 10 月に第 2 回目の追跡調査をし、この春の 2012 年 5 月に 3 回目の追跡調査を行いました。その第 2 回目の追跡調査のときに、こころの未来研究センターの連携研究員として、一緒にいろいろな活動をしている陶芸家で造形美術家の近藤高弘さんが、「命のウツワ」と銘打ったお茶碗を宮城県の「無限窯」とい登り窯で 2000 個作ってくれたので、それを宮城県と岩手県と福島県の被災地の方々に届けました。その際、鈴木岩弓教授が事務局長を務める「心の相談室」にも届けました。

今日のシンポジウムにも途中から参加してくださると思いますが、石巻市雄勝町の雄勝法印神楽の神楽衆の方々にもこの「命のウツワ」を届けました。千葉修司葉山神社・石神社宮司さんや、伊藤博夫雄勝法印神楽保存会副会長（現会長）さんたちに受け取っていただきました。実は、その雄勝法印神楽の伊藤博夫副会長さんたちと、今日の午前中に京都市内の開晴小学校・中学校でお会いしていたのです。

たとえば、この雄勝法印神楽などの民俗芸能が東日本大震災後の復興のプロセスの中で、地域の絆となり、力となっていることを強く感じてきました。いかに民俗文化・伝統文化が地域の重要な基礎・基盤となっているか、絆となっているかを再確認させられてように思います。

岩手県大槌町の仮設住宅にも昨年「命のウツワ」を届けましたが、その手芸グループの「はらんこ」の方々のつくった手芸作品を後ろの方で販売していますので、ご協力・ご支援いただければありがたく思います。また、福島県浪江町から相馬市に移住せざるを得なかった仮設寺の真言宗の清水寺にも「命のウツワ」を届けてまいりました。

そして、今年の 5 月 1 日から 6 日まで沿岸部だけで約 450 キロ、内陸部も合わせると、トータル 900 キロを石の聖地の写真家の須田郡司さんと共に巡ってまいりました。そして、各地に残っている神社や仏閣、民俗芸能の、いま現在がどういうものであるかを見てまいりました。

その途次、玄侑宗久さんから、宮城県気仙沼市の陸前階上にある地福寺というお寺のこ

とを紹介されて、訪問してまいりました。この陸前階上の辺り一帯は陸中国立公園の一つの岩井崎や伊勢浜がある大変風光明媚なところですが、海岸線に近く集落は壊滅的な被害を受けました。地福寺は高台にあったので 1 階天井近くまで津波が押し寄せましたが、何とか堪えて、このお寺が地域の避難所となりました。

そこの住職が片山秀光さんですが、片山住職は、伝統的な法話のスタイルの説談説教を現代のジャズやラップなどと絡ませながら、新しい説教節で法話をされているとてもユニークな方です。そういうかたちで、被災した人たちの心の中に、楽しさと、勇気と、面白さや力、エネルギーをかき立てながら、もう一度人々の生活の意欲や生き方や地域を再活性化させたいという活動をされている方であります。

けれども、このお寺より東側の海岸沿いの集落は、壊滅的な打撃により 1 軒も家がありません。私たちはこの気仙沼市から石巻市雄勝町に入っていました。その雄勝町では、今回 5 月 5 日の大須地区の八幡神社の例祭を皮切りに、各地でお祭りができて、そこで雄勝法印神楽が上演されました。大須では、お祭りの際、神輿衆が恒例の海の中に神輿を担ぎ入れました。これは、地域復興の一つの力強い形であり、シンボルになったと思います。

神楽衆は、復興プロセスの中で、自分たちの地域のハードの面では、まだまだ再生、復興が立ち遅れていてできないけれども、一番重要な自分たちの民俗基盤であるところの神楽が復興する中でさまざまな励ましとつながりが生まれ、神楽を通して界的なネットワークや支援を得ることができたと言われていました。

そういう意味で、民俗文化が持つ潜在的力は非常に大きいものがあると改めて感じた次第です。なお、雄勝町は、町の真ん中の中央公民館の 2 階の屋上に大型バスが津波で流されて乗っかっていましたのが、今は取り外されて、下に下りておりました。

今日の朝、京都市東山区六波羅裏門通にある、京都市立開晴小・中学校に行きました。その近くには空也上人が開基したと言われる六波羅蜜寺があります。ここには運慶のこの康勝が作ったとされる、口から 6 体の阿弥陀仏の小像が吐き出されている有名な重要文化財の空也上人像があります。平清盛とされる僧形坐像もあります。その近くに開晴小・中学校があるのですが、ここは、小・中学校一貫の学校です。

その小・中学校に雄勝町の中学生が行って、雄勝法印神楽を上演したのです。雄勝町にある雄勝中学校と大須中学校両校では、中学生たちが雄勝法印神楽を総合学習で学び、一地域と学校とが一体になって地域伝統文化を継承しています。

間もなく合併する両校の中学生たち、大須中学生は全校生徒が 14 人ぐらいで、3 年生 3 人が、雄勝中学校は 40 人ぐらいの全校生徒で 3 年生 14 人の合計 17 人のグループが、昨日位から修学旅行で京都に来て、去年から支援活動や交流活動のあった開晴小・中学校で、今朝、太鼓の演奏と雄勝法印神楽の上演をしたのです。そして、本日まもなく午後 3 時過ぎには、この会場に、両中学校の囃子方として同行した伊藤博夫会長さんたちが来てくださることになっています。

こういう交流を通して、いろいろなかたちでの復興支援の現在を見通すことができます。

私たちは、原発の問題を含め、環境や経済や政治の問題など、いろいろな問題を抱えています。このプロジェクトでは、宗教を一つの切り口にしながら進めてまいりましたので、今日も、本プロジェクトに関わってくれている連携研究員の宗教学者や宗教家にこの1年間の活動を振り返って報告してもらい、議論の場にしていきたいと思います。

それでは、まず最初に、福島県福聚寺の住職で、また作家でもあります、玄侑宗久さんに、今日の最初の発題「福島の現在と宗教の役割と課題」というテーマで話をさせていただきます。では、玄侑さん、よろしくお願い致します。

基調報告 1

「福島の現在と宗教の役割と課題」

福島県三春町福聚寺住職 作家

玄侑 宗久 氏

こんにちは、玄侑宗久と申します。いまみたいに資料があると大変分かりやすいのですが、なにも資料がなくてすみません。資料は使わないほうが坊さんらしいということで、ご容赦ください。このタイトルは鎌田先生に付けていただきました。けっして文学的ではありませんが、後で内容がすぐに分かる、シンプルなタイトルであります。

福島の現状はと訊かれれば、しばらく前までは、ぐずぐずしている感じかなと思っていたのですが、いまはぐずぐずを越えまして、ぐちゃぐちゃという感じですね。それと同時に、「なし崩し」という言葉も浮かびます。

去年のいまごろには、何をしなければいけないかということが、だいたいは分かっていたわけです。まず、除染。それから、継続的な線量の測定による健康管理。あるいは、賠償の問題があり、産業復興があり、雇用づくりがあり、また、風評被害の払拭ということが課題であろうと思われておりました。

それをとにかく進めていけばいいのだなとみんな思っていたのですが、なかなか絵に描いた餅は食べられないという感じがありまして、私の印象としては、一番肝心な部分が放置されたまま、いろいろなことをしている、しようとしているので、上滑りになっているのではないかという印象があります。

一番肝心なことというのは何かと申しますと、除染にしましても、どこまで低減させればいいのかと。現在の放射線量というのを、みんな測ることはできるのですが、その解釈はそれぞれに任されています。ですから、0.15 マイクロシーベルトでも、怖がる人は出ていく。そして、0.5、0.6 マイクロシーベルトでも大丈夫だと思う人は、そこにいるという状態なのです。

年間1ミリシーベルトというのがいまは目標値になっています。私はこれは幻の数値だ

と思っているのですが、年間1ミリシーベルトを目指すことは、かなり非現実的であるということが分かってきています。

2002年の資料ですけれども、全国の各都道府県で、すべて県庁所在地での測定ですね。それで見ますと、2002年の時点で、年間1ミリシーベルトを超えている県が11県あります。言ってしまえば、一番高かったのが、その時点では富山県です。次が、石川県です。あとは、順不同にしますが、福井県、岐阜県、滋賀県、兵庫県、鳥取県、広島県、山口県、愛媛県、香川県です。ここが、年間1ミリシーベルトを超えています。

それは、「自然放射線量でしょう」という声が聞こえそうですね。けれども、例えば、その20年前に日本で一番線量が高かったところは、2002年に第1位の富山県とは違うのです。20年前には、岐阜県が1位です。なぜ抜いたのか。ぐいぐいと追いついて抜いてしまったのが富山県と石川県です。福井県も、かなり上がってきました。何か、これはやはり西の方から飛んできているよなという感じが、私はするのですが。

ですから、環境放射線量といっても、いつ、どこから飛んできたものが混じって、そうなっているか分からないわけで、福島県も、間もなく環境放射線量と呼ばれるだろうと思っております。

現在は、何ミリシーベルトぐらいまでは大丈夫なのかということ、個人の判断に完全に任せています。お好きにどうぞという具合ですね。いま現在、約6万2000人の福島県人が県外で暮らしています。自宅に戻れていない方々が、津波被災者も含めてですけれども、16万人を超えています。

この6万2000人という、県外へ出ていっている方々が、どうなれば戻るのかというのが、いままったく見当が付かない状態です。何と申すのでしょうか、出ていったそのときには、爆発するかもしれないという危機感がありましたし、いまのように、ある程度落ち着いたこの状況とは違うわけですが、でも、落ち着いたと思えるいまも、戻らない。果たして戻ってしてくれるのか、どうしたら戻ってしてくれるのかが分からないのです。

というのは、必ずしも放射線量の低いところに避難生活をしているとは限らないからです。福島県一律で高いと思っていられる方も多いのですが、じつはそうではないわけです。例えば、福島県でも、川内村、今回、全村避難を決定した村の中心部は、0.15マイクロシーベルトです。ということは、神戸よりも、京都よりも低いのです、放射線量が。

ところが、そういう地域なのに、出て行ったまま多くの人々が戻りません。出て行って、いまや、そこに根を生やし始めています。しかも、県内に避難した場合は、川内村の仮設住宅が一番多いのは、郡山市です。郡山市は毎時0.5マイクロシーベルト以上あります。0.15マイクロシーベルトの川内村から、0.5マイクロシーベルトを超える郡山に避難して暮らしているわけです。

遠藤雄幸村長が「帰村宣言」をしました。できる限り戻ってほしいわけです。戻れる人から戻りましょうと、柔らかいお誘いですが、切実な願いなんです。「どうして戻らない

のですか」と訊きますと、公式見解だけが返ってきます。「除染がまだだから」、それと、「雇用がない」。そう答えるのですが、果たして、本当にそうなのか。

除染がまだというのは、毎時0・15マイクロシーベルトを、どこまで除染するのかという話になるのでありまして、それだったら、国中除染しないとならないことになるわけです。本当は、除染すれば戻るという単純な話ではないのではないかという気がしております。

一つ言えるのは、川内村は大変なんです。子どもが学校に通うのに。高校がないので、バスに乗って最寄りの駅まで出て、そこから汽車に乗って高校に行くのですけれども、そのバスも採算が合いませんので、子どもたちが乗るバスを走らせてもらうために、年間3000万円を村がバス会社に出しているのです。ほかに乗る人も、それほどいない。言わば、とっても不便な村だったんです。

はっきり申しまして、水道がない。これは、井戸水でやっていくのだという、半分思想もあります。ですけれども、それほどに不便だという側面もあるわけです。特に子どもの進学を考えた場合には、放射線量どこの話じゃないよという部分があるのです。

ところが、公式見解では、そういうものは出てこない。非常に分かりにくくなっているんです。ぐちゃぐちゃというのは、いろいろな意味を込めて申し上げたのですが、ぱっと見でどうしてこうなっているのかという理屈がちょっと見えなくなってきました。

先ほど「なし崩し」と申しましたけれども、例えば福島県は、「農業を、ぜひ皆さん再開してくださいよ」という方針です。新たに人を雇ってくれる農家とか、新規に農業に参入したい方には補助金を出しますよと大々的に支援しようとしているのですが、申請があったのはわずか3件です。宮城県、岩手県の方は、農業の再開率が60%を超えていますが、福島県は17%です。果たして、この土地での農業はやっていけるのだろうかという点が、ものすごく大きな不安になっております。

先ほど「風評被害払拭」という課題を申しましたけれども、「風評被害はないんだ」と言い切る方もいるのです。つまり、危ないものには近づかないに越したことはないという考え方からすれば、少なくとも福島県は他県より明らかに危険なのだから、それは風評ではなくて実害の可能性が高い、ということです。

これは、大震災以前から、日本人の中に芽生え始めていた考え方だろうと思います。特に医療の世界で、盲腸を切るのにも死亡例の話までしておくという、悪しきインフォームドコンセントです。要するに、最悪のことまで話しておけば、訴えられることはなかろうという態度ですね。

本来は、インフォームドコンセントというのは、患者の十分な納得を得るための、十分な説明なわけですから、必要とされるわけですがけれども、そういうかたちではなくて、最悪のことまで言うておけば訴えられませんかよという、保身のすべとして使われている部分があるわけです。

その態度が、低線量の放射線に対しても取られている。いいか、悪いか分からないものは、悪いと考えておいた方がいいでしょうということです。ND（不検出）だといっても疑

っておいた方がいいでしょうと。そういう態度に、あちこちでぶつかります。

その態度が半歩進めば、福島県の人とは結婚しない方がいいでしょうということに、すぐに入ります。でも、そういう差別的な態度を取っているとは誰も思っていない。そういう傾向があるようであります。

実際、福島県人ではない場合はそれでいいのだろう、いいのかもしれないとも思います。ただ、福島県に住んでいると、その考え方では住めないわけですので、非常に乖離が激しくなっています。

実際、いま、放射能の問題というのは、放射線に関する心療内科というのですか、心理ケアの学科が南相馬の市立病院にできました。放射線に関するメンタルケアをする科です。もう放射能の問題というのは、実にメンタルな問題なんです。そういう意味では、これは宗教の問題でもあるのかもしれないと思います。

実際、放射能について、表立って話題にすることは本当に少なくなってきました。「どのぐらいが安全だろうね」とか、そういうことをあらためて話すことはなくなってきました。そうするとどうなるかといいますと、深層心理の方になってしまうというのでしょうか。ですから、福島県から出ていっている6万2000人というのは、じつは出ていかない人々自身の中に住んでいる潜在意識のようなものなのです。

つまり、私の中にもそうした気持ちが無意識に存在している。昼間起きているときは、そんなことはないと思っているわけです。でも、夜眠ると、大変な悪夢にうなされる人々が大勢いるのです。心理療法をされている方のレポートを読んでも、「解離」という症状も出てきています。それは、やはり表面上は平気に暮らしているながら、自分の中に、福島県から出ていくような、何か別のキャラクターが解離するのではないかという気がしております。

産業の復興ということでは、いま新聞によっては、非常に大きく扱っていますけれども、産業復興企業立地補助金というものを、国が大盤振る舞いで「出す」と言っていたわけですが、あまりにも申請が多かったために、「3分の2を援助する」と言っていたのを「3分の1にしたい」と。あるいは、新規雇用にかかわらない、例えば、「食堂とか、そういった福利厚生施設の建設費まで3分の2を出すことはちょっとできない、6分の1にまけてくれ」という話が出てきていまして、国と県が盛んにやり合っております。

これも、銀行の人などに聞いてみますと、大きな企業がその規模を拡大して、大量に人を雇おうということですから、なかには今回の震災被害とは関係ないケースも混じっている。この機に乗じて、という言葉は悪いかもしれませんが、そういう側面も感じられるように思います。

ですから、何の世界でもそうですけれども、大きいところはさらに大きくなり、ちょっとダメージを受けたところは、それがどんどん広がる、という方向にあるような気がします。

壊滅的な打撃を受けているのは、農業者、漁業者です。あるいは、もちろん林業という

ものもありますけれども、これが回復することが果たしてあるのだろうかという思いがあります。

風評被害というものは、われわれは、あると思っています。この間、6月23日ですか、WHOが日本に来もしないで、政府発表のデータをコンピューター上でいじってつくったものを発表しました。あんなひどいものはないです。何をやっているんだろうと思いました。

福島県の警戒区域内は除いて、飯館村と浪江町以外の県内全域をみんな同じ色で染めたのです。ほかの県は、全部違う色です。どういうふうにすると、そういう色分けができるのかなと思って、よく見てみると、1から20ミリシーベルトを同じ色にしているのです。ほかの県のほうは、1から2ミリシーベルトです。これじゃダブっているでしょう。しかしそういうことをすると、とにかく福島県だけを違う色にできるんですね。本当にすごいことをするなと思いました。

風評被害を除きたいというのは、やはり非常に大きな欲求としてありますので、私の町に実生プロジェクトというものを立ち上げたのですけれども、そこで、多少予算がありましたので、全国のお寺さんをお願いしまして、各県2カ寺以上ということで、放射線量計をお願いしました。

その土地の環境放射線量を測っていただきたい、と依頼したんです。なぜ、お寺さんに頼んだかということ、お寺さんは厄介なこと言いませんので、ありがたいことです。もともとこれは女房のアイディアで、女房が電話をかけまくりまして、あっという間に、103カ所のお寺が受けてくださったので、北海道から石垣島まで、全国各地の放射線量を測り続けています。その第一弾の結果が、今月末には出てきて発表できると思っておりますので、お楽しみにお待ちいただきたいと思います。

福島県だけに放射能があつて、ほかはほとんどないというように思われているのが何とも切ないわけです。私は一時、放射線量計を持って全国を歩いていた時期がありますから分かりますけれども、本当に三春町を出てきて、こっちに来ると、こっちの方が高いのです。申し訳ないのですけれども。ですから、その辺、詳しくご報告したいなと思っております。

なかなか宗教に話が進みませんが、もう一つ、大事なことですので言わせてください。いま、福島県で国や行政の動きを見ていて感じるのは、県民は非常時だと思っているのに、態勢が平時なのです。というか、非常時の態勢が組まれなかったことが非常に大きい。

平安時代ですと、普段は左大臣の指揮権が一番強かったわけですが、戦争とか、病気が発生したり、事故が起こったり、そういうことになりましたと、右大臣が一番の指揮権を持つのです。まったく指揮系統が変わるということがあったわけですね。

今回、復興庁というのは、既成の省庁を超える力を持たせてもらえませんでした。ということは、既成の省庁が、それまでの在り方をまったく変えない中で復興作業をしていかなければならない。このことが、とても困難なことだという気がしています。市町村長に

すれば、お願いに行く場所が1カ所増えただけの話ですから、復興のためといっても、ままならないことが多すぎます。

例えば、どういうことかと言いますと、除染しましょうと、除染するのに、全国で人を募っているのはご存じですか。雨が降ると除染が休みなので、うちの寺にも人が来ます。

「除染で三春町に入っているのですけれども、ちょっと来てみました」と言って、佐賀県の人、あるいは、姫路の人が来たりします。「雨の日は除染ができない」ということで、いろいろ聞いてみると、全国からそうやって大勢来ているのです。

どこで応募したのですかと訊くと、「姫路で雇われた」「佐賀で雇われた」わけです。そして現場にやって来てみると、元請けが清水建設で、その間に三つほど入って、4次請けで雇われていた。はっきり言って、4次請けで1万2000円です。5次請けになると8000円になります。1次請けは幾らだと思いませんか。これは言わない方がいいですか。言ってしまいますね、4万3000円です。除染と堤防づくり、これがある以上、ゼネコンは少なくとも10年以上は安泰です。

しかし、そういう中で、それで本当にいいのかという動きがあちこちで出てきています。先ほど映った気仙沼の地福寺さんの片山さんの周囲でも、気仙沼として「海と共に生きる」というスローガンを立てたのです。あれだけ海にやられながら、海と生きることはやめられない。ということで、そういうスローガンを立てて、コンクリートものの堤防は一切つぐらない在り方を選択しようと、大勢の人が動き始めました。

いったいどうするのか。コンクリートの防潮堤をつぐらないで、しかし、実績を持っている方がいるのです。『瓦礫を活かす「森の防波堤」が命を守る 植樹による復興・防災の緊急提言』という著書のある宮脇昭さんという方がいますけれども、この方は、海外でも多くの実績を残しています。今回、松島が非常に被害が少なかった。ああいう島を人工的に幾つもつくるのは不可能ですけれども、松林の間に常緑の照葉樹を植えようというんです。その土地にあった、タブとか、サカキとか、ツバキとか、そういう木を植えていこうという計画です。

幅10メートル以上ないと効き目も少ない。幅10メートル以上のものが、5年たつと、かなりのボリュームになります。こういう森を、がれきを積んだ上につくりましょうということを、この宮脇さんは、実際にやっていたらっしゃるのです。世界何十カ国で植林をしてきた方です。

それを、復興構想会議の議長であった五百旗頭（真）さんと、それから、その下の検討部会というところのトップであった飯尾（潤）さんのところに、宮脇先生は話に行ったそうです。「ぜひ、こういうやり方を取り上げてほしい。復興構想会議で扱ってほしい」というのを宮脇さん提言したんです。御著書で初めて知りました。そんな話は、復興構想会議ではまったく出てきませんでした。そして、国の方針として、嵩上げとか高台移転とか、防潮堤を何メートルにするかというような話になっていたように記憶しております。

いま、本当にいろいろな意味で、自然観というか、そういうものも問い直されているの

だろうと思うのです。神道のベースには、自然の驚異というものがあります。それをなだめて祭るといのが古代神道の基本ですから、そこを崩すわけにはいかない。

15メートルの津波が来た土地で、16メートルの防潮堤をつくったとて安心はできないわけですし、16メートルの防潮堤を隔てた海が、恵みを与える海であることは、もうないでしょう。泳ぐ場所さえなくなる。

ですから、そうやって戦って敵に回すのか、それとも、いざとなれば逃げる覚悟で、もう少し自然と共生できるやり方を選んでいくのかです。そこが、すごく問われていると思うのですけれども、そういう議論が復興構想会議で煮詰められることはなかったのです。議論の話題にしてくれなかった部分があります。

ついでに申し上げますが、除染の方法も、国が定めたやり方でないと、お金が出てきません。ところが、国が定めたやり方というのは、基本的に、表土を削るというものです。お釈迦さまは、「鍬を入れることさえ殺生になるから、してはいけない」と言った方ですから、当然表土を削り取ることなど許すはずもない。そんなことを持ち出すまでもなく、農民にとっては、何年もつづけてきた栄養分豊富な部分を捨てることですから、決定的なことですよ。

果たして、それがベストな方法だろうかという疑問が、農民の間には、起こってきています。しかし一方には、いろいろなやり方を試している人たちがいます。有機的なものを入れ込んでいって、実際に線量が下がることも起こっています。ただ、国が定めた方法じゃありませんから、補助金は出ないということになります。しかしそれでもやはり国の指示するやり方ではやらないぞという人々が出てきています。それ自体は喜ばしいことではないかと思うのですが、なかなか苦々しく、国の方は見ているようであります。

あと何分ぐらい残っていますか。

○鎌田 あと5分です。

○玄侑 いま、元の警戒区域の中にあるお寺というのは、だいたい60カ寺ありますけれども、そこを国は、立ち入りできないとされた場合は、「基本的に、買い上げて、国有化したい」と言っているのですが、お寺はそういうことができるだろうか。つまり、代替えの土地を用意してくれて、墓地もここでどうですかというものを用意してもらって、そして、檀家さん全ての了承を得て、では、そっちに行きましょうかということにならないといけないわけですが、そんなことが可能でしょうか。

私は不可能だろうと思います。お寺、神社もそうだと思いますけれども、あのエリアの中にあるお寺や神社は、どうなっていくのだろうと、正直不安で一杯です。

いま現在も通いで、住職さん一家が毎週掃除に行くとか、中には、檀家さんに月2回集まってもらって掃除をしているところもあつたりしますけれども、本尊さまもそこに置いたままなのです。もちろん、仮設に持ってこられる本尊さまではないですし、アパートに

置いてもしようがないということもあって。あの中ので神社仏閣が、どうなっていくのかというものが非常に不安です。

そういう逆境といいますか、困難なことが多い福島県ではありますけれども、最近、私の頼りにしている経典は『維摩経』です。ヴィマラキールティという、維摩と言われる人が主人公ですけれども、非常にすごいことが書いてあるのです。

「仏法を助けているのは魔王である」。62の外道というものがあるらしいですけれども、それがあからこそ仏法に立ち返ろうと思う。あるいは、自分が非常にひどいことをしてしまった。自分の中に煩惱があるので、もう1回でも、何回でも、仏道に立ち返らせてくれる。

だから、そういう意味では、煩惱も悪事もそれじたいが仏道へと促すキッカケになる。いまは放射能というものが魔王なのでしょうし、菩提心を起こさせてくれるありがたい放射能さまなのかなと思っております。泥の中でしかハスは咲かないといいますけれども、いまの福島は本当にぐちゃぐちゃの泥の中ですので、ハスが咲く最良の環境にあるのかなと思っております。

最後になりますが、本当は天災などへの自然観だけでなく、その中に動物も含めたいわけで、その意味で20キロ圏内は本当にいま大変です。ウシがまだ1000頭以上います。基本的に、同意を得なければ殺してはいけないという状態のままですが、ホルスタインは自分だけで増えることはできませんけれども、和牛は自然交配ができるのです。新しく生まれている子どもたち、子ウシがいます。

それは、耳標がありません。耳標がないウシに関しては殺してもいいという書面を、農林水産省はこの1月に出しました。果たして、それが、日本人の生き方なのだろうか。そう、強く思うんです。

イノシシもどんどん増えています。イノシシは、クマと棲み分けますので、ナメトコ山のクマがいる岩手県にも、秋田県にもイノシシはいないとされていたのです。ところが、いま、イノシシが両県に出ています。北上しているのです。

美しい蓮の咲き乱れる、野生の王国。福島はいま、すごいところになりつつありますけれども、とびきりの仏法が生まれるのではないかと期待しております。どうもありがとうございました。

○鎌田 玄侑さん、ありがとうございました。

1年前はぐずぐず状態、1年後のいまはぐちゃぐちゃ、なし崩し、そういう状態になっている。そのことも含めて、後半の第2部のディスカッションで、さらに議論をして深めていきたいと思っております。

では、時間も貴重なので、次に進めたいと思っております。島菌進さんの「宗教者災害支援連絡会の活動15カ月を振り返って」、よろしくお祈りいたします。

基調報告 2

「宗教者災害支援連絡会の活動 15 カ月を振り返って」

東京大学 宗教学

島菌 進 氏

皆さん、こんにちは。私の3月11日以後の活動は、普段の研究教育活動を少し減らしまして、災害支援と原発問題に関わってまいりました。その二つは大いに関わり合っているのですが、少し焦点がずれております。

原発といっても、私に関わったのは放射能の影響問題ですけれども、これは科学者や専門家に大きな責任があると思います。政府、東電ももちろん責任があるのですが、それを、政府、東電も、そういう問題については科学者に相談するわけなのです。しかし、その科学者が適切な情報を提供していない、できない状況になってきたことが、一番大きいとされていて、どうしてそうなっているのかということを考えています。

最近はそういうこともありまして、福島の方へ行くことが多いわけなのですが、多いといっても、数回になります。ですので、そんなに詳しく土地の状況を知っているわけではないのです。

私の最初にこのことに関わろうと思ったことは、東京にいてもできることをまずやってみようということでありました。宗教界の方たちが居ても立ってもいられないということで、早くから救援活動に動かれました。

しかし、それは、各団体、各個人は、それぞれに大変立派な活動をしていらっしゃるのですけれども、横につないでみたら、もう少しいろいろなことが分かってくるし、力ももう一つ充実してくるのではないだろうかということで、横の連携を作っていこうと考えました。つまり、助ける力があちこちで動きやすくしようというわけです。

先ほど、ぐちゃぐちゃとか、ぐにやぐにやというあれでしたけれども。逆に言えば、マグマのようにいろいろ出てきていると。これを少し横の連絡を付けて、方向付けができればいいなということで、いろいろな活動を初めてまいりました。

そもそも、今回は宗教に人心が向かっている気配がある、そういうことがまずあります。新聞でも、こういうふうには僧侶も、比較的若い僧侶が、これはたぶん向こうには、まだたくさん遺体が転がっている状況でしょう。4月1日です。そういうところで、読経している、（スライドを見ながら）こういう姿が新聞に報道されることが多かったです。

新聞はだいたい宗教についてはスキャンダル以外めったに報道しないのです。しかし、今回は、読者も追悼の気持ちを持っている、そういうときに、こういう出したい気持ちがあったということですね。多くの人たちが悲しみ、痛みを分かち合いたいというときに、

宗教は不可欠なのではないだろうか。こういう法要に来ている、読経の声が聞こえる、そういうことが必要だと感じた。

そして、多くの方が、先ほども家へ帰れない、なかなかご仏壇を運ぶことはできないですから、それで、まずはお墓へ行って何とかしたいということです。（スライドを見ながら）そのお墓がこんな状態になっている。辛うじて、お骨だけでも取り出そうということです。

しかし、こういうふうには、すぐお墓へ行って何とかしたいという気持ちです。日本人の中にある、それは、すぐにみんな理解できると思います。そういう中に、われわれの心の奥深いところにある宗教心というものが見えてくる。

（スライドを見ながら）これは、岩手県陸前高田の近所だと思いますが、神社が、これは階段の近くなので、別の神社です。ほとんど流されてしまった。この場合、立派な鳥居だけ、石の鳥居が建っているの残っているのですが、社殿はないのです。それでも、これは8月の初めでしたが、社殿はなくてもお参りができる体制をつくっている、こんな状況がありました。

支援に行く人、あるいは、地元の方が心を通い合わせながら支援活動をしている。その中で、宮沢賢治という人が多くの人の心に浮かんだ。これは岩手県の詩人であることも関わります。

（スライドを見ながら）そして、これは、宮沢賢治が描いた絵に、後から色を付けたものですが、『雨ニモマケズ』は晩年の賢治が手帳に書いていたもので、決して発表するつもりはなかったのですが、こういうものが誠に懐かしく感じられた。

ここで心に残るのは、例えば、「慾ハナク 決シテ瞋ラズ イツモシヅカニワラッテキル」、こういうふうな言葉が、何かふに落ちる。「ジブンヲカンジョウニ入レズニ ヨクミキキシワカリ ソシテワスレズ」です。

そして、ここに「東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」と、「行ッテ」というのが大事なのだと気が付いた方たちがいるのです。何か手伝いに行くのですが、しかし、その前にまず行つてと、何もできることがないのに、行ってどうするのだということだけれども、しかし、「行ッテ」というのが大事なのだと感じられたのです。

いまでも玄侑さんのお話の中にも、そういうニュアンスがあったと思いますが、福島へ行くと、やはり「来てくれて、それだけでいい」と言っただけだと、われわれは少しほっとする。福島土地そのものが汚れているので行きたくない。ある方に聞いたところでは、福島の方はお土産を出すと、そのお土産はどこかで捨てられてしまうのではないかという気持ちがしてしまう。そういうふうなときに、行って、そこで何かをするという、そういう意味がこの詩の中にあっただと、あらためて気が付くことができました。

ちなみに、先ほど玄侑さんが言った『なめとこ山の熊』、イノシシではなく岩手県にはナメトコの山のクマがいるというのは、宮澤賢治の作品の名前です。そこには、獵師が出

てきて、クマを殺すのですが、実は、心の中ではクマと友達である。そして、その獵師自身も商人にいじめられているという話でありました。

こういう賢治の姿が懐かしく思われる、被災地の方もそうでしょうし、あるいは、支援活動をしている方もそうでしょう。

それは、実は、『雨ニモマケズ』には、ここに「デクノボー」と出てくるのです。「ミンナニデクノボートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ」と。デクノボーというのは、『法華経』に出てくる常不軽菩薩という人を、賢治なりに文芸化したものなのです。そう言われております。

常不軽菩薩というのは、どんな人にも仏性があるので、どんな人に対しても拝むのです。なので、何も軽んじないというので、常に軽んじない菩薩という意味です。しかし、実は、サンスクリットでは、元の意味は、常に軽んじられるという意味だそうです。そんな誰でも拝むと気色悪いといって石を投げられる。ですので、いつも、逆に敵意を浴びせられる、そういう存在でもあります。

そうまでして、何を彼はしようとしているのかということ、増上慢という、慢というものを下げる、そこから解脱する。そういうことを狙っている。また、それは辱めを受ける、それを忍ぶ、忍辱（にんにく）という言葉が仏教にはあるのですが。そういうものを仏教のかなり核心と考えている。

これは、菩薩行というものの中に、そういうことがある。菩薩行というのは、自分自身が仏になるための修行をするのに先立って、困っている人のために何かをする。そういうことであります。

仏教のいろいろな修行を表す言葉の中では、仏教というと戒定慧の三学を営むのですが、つい定とか、慧を中心に考えがちです。定は、瞑想修行であり、心を静めるという非常に大事なことであります。慧は仏の知恵を学ぶ、実際にはお経を学んだりするということですが。

しかし、戒というものがあります。身を慎む、そちらの要素というものが、賢治にとっては非常に重要だった。それは、賢治はベジタリアンでもありましたが、生きものを傷付けない、生きものを傷付けることは、われわれが何らかのかたちでそうしなくては生きていけないのですけれども、まずは人間自身を傷付けない。そういうことを思います。

三学と並んで六波羅蜜という実践目標があります。大乘仏教の修行方法ですが、布施、持戒、忍辱、精進、そのあとに、禪定と知恵があります。この前の四つは、慢とか、忍辱とかいうことに関わることであろうかと思えます。

天理教の方たちも大変熱心に活動しております。天理教では、八つのほこりを払うというのです。私は、いわゆる新宗教、明治維新前ぐらいから出てきた宗教は、仏教系にしる、神道系にしる、新宗教といえると思っております。そして、伝統的な仏教とそんなに違わないのだと思っているわけですが。

その新宗教の基本的な実践の中には、「心なおし」というものがある。心を清め、心を

改めていく。その心を改めていくことのかなり重要な部分は、慢ということに関わっており、そして、人に対して優しく関わる、共に生きていく気持ちを起こすことではないかと思えます。

ですので、そういう新宗教の理念は、どちらかというところ、明治から戦後にかけては、仲間づくりを熱心にやるという方向に働いた。つまり、信仰仲間をつくって、お互いで励まし合って、元気付けていく。実際、非常に孤立して弱っている人たちが仲間に入ることで元気になっていく。そういう方向で働いてきたと思えます。

しかし、1970年代以降というのは、そういう仲間づくりということが、ややうまく機能しない、あるいは、むなしく感じられる。そして、外との壁をつくるようなことに見えてくる。そういうことがあったと思えます。そういう中で、仲間の外に、むしろ開かれた活動の中で心なおしというものの可能性が見えてくる。そういうことがあったのではないかと思えます。

(スライドを見ながら) これは、真如苑です。真如苑という団体は、そういう意味では、そういう流れを非常によく表している。非常に熱心に瞑想修行をやります。個人主義的でもあるのだけれども、しかし、同時に、これはS e R V (サーブ) という団体を持っていて、大変熱心に支援活動をしています。

そして、これは、阪神・淡路大震災の影響が大きいのですが、多くの新宗教は、これまでも災害支援を大変熱心にやってきたのですが、それは、長い伝統を持っているだけに、新しい時代のやり方には、やや距離がある場合がある。真如苑の場合は、少し後発であります。阪神・淡路大震災で身に付けたような、現代社会になかなかマッチした活動が行われていると思えます。

ですので、この東日本大震災で行われている宗教界の支援活動というのは、災害の支援という面で、伝統を継承していると同時に、1970年代以降のより個人主義化してくる、そして、固定的な集団をつくるよりは、ネットワーク的な関係の中でお互いを力付けていくというふうな、そういうタイプの性格を持っているものではないかなと思えます。

例えば、グリーンケアです。(スライドを見ながら) このパンフレットは、上智大学でつくったものですが、こういう言葉は阪神・淡路大震災のときには、まだなかったのではないですかね。そのころから出てきた。ということは、亡くなって、以前なら、お通夜があり、法事があり、親族集団の中でお互いに悲しみを分かち合っていた。そういうものがばらけてきてしまって、悲しみが晴れない、共に晴らす仲間が見つけれない。そのために、いろいろな企てをしなければならない。

グリーンケアというのは、自分のような悲しみを持っている人たちが寄り集まるということです。似たような悲しみを持った人たちが寄り集まる、そういう場を探している人たちがたくさんいるということです。そのようなことが背景にあった。

一方、孤立して助けの道が非常に見つけにくい人たちが増えている。仏教会では、若い人を中心に、そういう人たちに手を差し伸べようということが行われるようになってきて

いた。

『ルポ仏教、貧困・自殺に挑む』（岩波書店、二〇一二年）は、見事にそういうものを捉えた本だと思います。磯村健太郎さんの本ですが。自殺や、貧困です。自殺をしたいと思っている人が、といっても、自殺をしたいのか、何とかこの世で生きる道を見いだしていきたいのか、そういう人に、彼らの方もどこへ助けを求めていいか分からない、外からも彼らにどう手を差し伸べればいいのか分からない。しかし、お坊さんたちが、そういう人たちを連絡を取ることで、立ち直りのきっかけを見いだす、そういう活動がだんだん増えてきているということです。

あるいは、貧困です。釜ヶ崎に行きますと、といっても、私はこういう活動をしている方に連れて行っていただいて、1泊、釜ヶ崎の最高級ホテルに泊まったというだけあります。最高級ホテルというのは、1泊2000円代でありますけれども。

それでも、少し分かったことは、韓国からのキリスト教系の団体ががががやっている。そして、食べものがない人に礼拝に参加すると、パンをあげている。そういうタイプの支援をしている。

他方、静かに待っている宗教者もいる。本田哲郎神父さんという方がおられますが、2畳か、3畳の部屋にお一人で住んで、教会の2階で散髪をしている。礼拝に決して「来い」とは言わない。そういうかたちで、しかし、そこにいる、さっきの「行って」です。そして、いつの間にか、路上生活者たちと友達になっているというか、そんなタイプの支援活動です。こういうことが、この10年、20年人知れず進んでいた。

こちらは寺というか、お寺自身も、普段のそういう地域社会の安定した檀家さんとのつながりというものが、お寺の活動の基礎でありますけれども、都市などでは、高橋卓志住職の神宮寺は必ずしも都市地域ではないですが、もっとさまざまな人に手を差し伸ばす、必ずしも、葬式、法事中心の活動にとどまらない、新しい活動をする、そういうお寺が増えてきているということがあります。

これは、磯村さんの本に出ているのですが、この高橋卓志さんたちのことは、上田紀行さんが『がんばれ仏教!』（NHK ブックス、二〇〇四年）という本に書いたりしまして、このお寺は法要にも1000人集まるとか、すごいお寺なのですが。

もともと豊かな資源があり、大変有能なお坊さんなので、そういうことができる。どこでもできることではないのではないかと思います。こちらの本に書いてあるのは、もうごく普通の僧侶の人たちが当たり前の活動として、決して気負いもなく、そういう活動をしていることが、この本にはよく書かれております。

こういうことは、これは宮澤賢治の『農民芸術概論綱要』の言葉でありますけれども、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」、こういう言葉は、仏教の經典の中にはごく普通にあるものではないかと思えます。それをこんなふうな、宮澤賢治は言い換えているのですが。

こういうふうな気持ちで救援活動を、ごく当たり前のこととしてやっている。そういう

方がたくさん増えている。それは宗教界でそうだということではなくて、一般のボランティアをなさっている方の精神と、その宗教的な背景、つまり日本の文化の中へいつの間にか入り込んでいる宗教的精神とは通じるものがあるのだと、私は感じております。

しかし、そういうものが少なくとも日本では見えにくかった。みんなが無宗教だと思っていて、宗教が来ると怖いという感じで、布教活動はやめてくださいと。避難所などにも、宗教団体の名前を名乗っていくと、まず、ノーということになってしまう。

しかし、では、避難所にいる方の中には最近たくさん、ごくしばらく前に大事な人を失って、まともに祈る助けを必要としているとか、いろいろな困難を抱えている人がいるわけです。宗教者が力になれないはずはないのです。

しかし、そういうニーズがあっても、少なくとも、行政を通したら受け入れてもらえない。遺体を処理するときだって、僧侶が入ってくることを拒んだ行政組織もあったわけです。

そういう中で、宗教者が横に連携することが始まった。仙台で、まずは火葬場で、宗教を超えて連携しながら待機しているところから、心の相談室というものが始まりました。これについては後で鈴木さんが説明されると思うので、あまり詳しくは述べません。

だんだん拡充してきておまして、宗教、宗派によらない活動で、それぞれの宗教の立場はあります。もちろん、深く人々を導こうと思えば、各団体へ入っていくこともありうるわけですが、取りあえず、そこまで行く前の段階で、いまニーズを抱えている方たちの願いに応じたことをする。そのためには、宗教、宗派を超えて連携する必要がある。こういう活動です。

最初は弔いから始まりまして、だんだん心のケアのようなことへなっていく。悲嘆ケアというのは、グリーンケアですが、Cafe de Monk というものが重要な活動で、要するに、お菓子、お茶を持って行って、被災者の方とお話をする。傾聴ボランティアのようなことも進めておられます。

これは、もともと医療の関係者と緊密に協力しているわけです。つまり、最期のみとりを熱心に、この仙台地域でなされていた岡部（健）先生という医師の方が、心の相談室の室長でもあります。

つまり、これは災害時の心の相談室であると同時に、平時にも、死のみとりに関わる協力組織になっていく可能性があるというのです。そのために、東北大学でも、実践宗教学という講座ができたという状況です。これは、鈴木先生からご説明があるかもしれません。

私どもは東京で、いわば、それに対応する活動が始まった。それが宗教者災害支援連絡会で私がその代表です。鎌田さん、この話を私はしなければいけないかったですね。

○鎌田 あと5分ぐらいです。

○島藺 あと5分でしなければいけないそうですが。この話をがんがんやります。

こういうものをつくりまして、いろいろな宗教団体がやっている支援の情報を交換する。それで、各集団や個人がより充実した活動をしていくための力になろうということです。この理念がここに出てきておりますが。重要なことは、困っている方の立場で、それに応じた活動をする、そのために何ができるかを協力して考えていく。

4月1日に立ち上げまして、毎回、だいたい情報交換会というものをやりますと、50人から70人ぐらいの方が来てくださる。東北などからも、宗教者の方に来ていただいて話をするということです。

ほかにもいろいろな集いをやっております。（スライドを見ながら）これは、皆さん見えませんね、申し訳ないですが。情報交換会を1回から9回やりましたという話です。毎回、このような支援活動を行っている宗教者の方のお話を聞きながら、お互いの意見を出し合う、情報を交換する。

そして、いろいろなイベントもやっております。これは、国際宗教研究所というところと連携して行ったシンポジウムです。神道の方、キリスト教の方、創価学会の方、そして、先ほどのサンガ岩手、大槌町で支援活動をしている吉田（律子）さんという方、こういう方の話を聞きながら討論をする。

これは、今年4月14日に東大の安田講堂で行われたもので、ハンガリーの大使館も協力してくれまして、ハンガリーの音楽家、東京藝術大学のアンサンブルに協力していただき、双葉町の方々が、埼玉県加須市に避難している、その方たちをお招きしてバングラデシュの方たちがカレーをつくってくださり、東大の構内を案内して、音楽会をやり、そして、シンポジウムをやった。こんな活動も致しました。これは、それです。イスラムの方も、かなり熱心に活動してくださっていらして、そういう状況についても伺いました。

これは、私どもの宗援連（宗教者災害支援連絡会）の事務をしてくれている浄土宗のお坊さんです。展示をしまして、どんな団体が、どういうふうに支援をしているかということを紹介し合った。

これは、東京藝術大学のアンサンブルです。みんなボランティアでしてくださったことです。

これは、そういう中から出てきている、先ほどの動きですが、日本の病院には、何でチャプレンがないのか。人が死ぬときには祈りを必要とするでしょう。あるいは、何か話をしたい、死というものについて、自分一人で考えているものを超えていきたいという気持ちがあると思います。私のおじも、亡くなる前に私を呼び出しました。たぶん、私が宗教学をやっていることが大きく影響していると思います。

何かそういう気持ちを多くの方が持たれますよね。遺族の方も、家族の方も、何か相談したい気持ちがあるのではないかと思います。欧米ならば、当然そこにチャプレン、施設付きの牧師、神父さんがいたりするわけです。そういう役割を日本でも育てることができるのではないかと。

刑務所には、教誨師というものがあります。刑務所から出てきた方には、保護司という

方です。そういうことでは、宗教者は大いに活躍してきたのです。では、何で刑務所だけなのかしらという非常におかしな状況です。

精神科の先生方と話すと、精神科の方たちがその代わりをするようになったり、そういうふうになっているところもあるわけですが、それは、とても彼らの本当に任務ではないわけです。これは、新しい動きです。

やはり阪神・淡路大震災から、今回の震災を通じて、大きく変わってきた。これは、公共空間の中に宗教が現れてくる。その現れ方は、特定宗教団体として現れてくるのではなくて、宗教団体の枠を超えた協働の存在として役割を果たすようになるということです。

ごく最近、こういうシンポジウムが大正大学で行われました。臨床心理の先生も来ていただいて、どういうふうに、こういう役割が展開していくかを考えているということです。

いま、われわれが力を入れているのは、この保養プログラムです。全国の方たちが、福島の子どもたちに、少しでも元気な時を過ごせるように、たとえ放射能を浴びていても、元気に過ごせば、免疫力が回復するということが非常に大事です。ウクライナや、ベラルーシ、つまり、チェルノブイリの人たちは、いまでもやっています。20年以上を経てです。そういうことで、これをぜひ頑張っていきたい。これは、真如苑が企画しているものです。こんなプログラムです。

私どもは、曹洞宗の伊達市にある成林寺さん、こちらは、曹洞宗の青年会の現地対策本部ですけれども、ここと組んで、いろいろ活動させていただいております。若い方ばかり、僧侶の方が、もうある程度、放射線の量があるところですが、ここを拠点として、岩手、宮城、福島の支援活動をしているわけです。

私どもは、宗援連としても、少し経験しようということで、これは、相馬郡新地町です。仮設住宅の集会場でお話を聞く、天理教の方たちと宗援連のメンバーが何人か来てやらせていただいた。

これは、二本松の浪江町の方たちが避難している場所です。ここには玉三郎も来たそうです。玉三郎と比べると、ずいぶん私どもは人気が少ないかなと思うのですが、玉三郎は来たけれども、「握手はノーだ」と言ったということで、大変実は評判が悪かったです。

これは、福島市のつるりん和尚は常円寺さん、この方は除染活動を大変熱心にやっています。自分のお寺の境内を置き場に解放してやっておられる方です。学校に行く通学路には、かなり放射線量が高いところがあります。20 マイクロシーベルトが、まだ出てしまうところがあるのです。そういうところを若い僧侶の方たちと、私どもと一緒にやらせていただいたわけです。

最後です。これも、阪神・淡路大震災からだんだん出てきたものですが、いま、足湯隊というものがあります。学生もするのですが。足湯といっても、温泉ではなくて、バケツに湯を張ってマッサージをする。そうすると、その間にだんだんお話をするようになる。一種の傾聴のための方便でもあるわけですが、高野山の足湯隊の方たちが大変熱心に行っています。

これは、私の思うところは、被災地の方たちも確かに慰むと思うのですが、実は、支援する側の人たちが修行しているというニュアンスが非常に強いと思います。学生もやるのです。そして、学生たちも心を開く、若い僧侶たちもこういうことを通して何か大きなものを学んでいると思います。

先ほど本田哲郎神父の話をしました。彼は六本木の教会から釜ヶ崎へ行きまして、最初に釜ヶ崎の方たちに毛布を配って歩いたら、おっちゃんから、「おお、よく来てくれたな」と声を掛けられたと、そのときにはっと気が付いた。「自分が相手のことを思いやるというよりも、よほどそのおっちゃんの方が神父のことを思いやってくれている、そういうことに気が付いた」と言っております。

そんなふうなことがあるのだと思うのです。つまり、支援するということは、こちらから力を出すのだけれども、向こうから力をいただいている、そういうようなことがある。

これは、宮澤賢治の『マグノリアの木』という短編です。マグノリアというのはモクレンです。これは、かなり深い仏教哲学的な意味のあるものですが。天使と諒安というお坊さんが出会う。暗い暗い気持ちになっていた諒安が、ぱっと空が晴れて、天使が下りてきて、こういう歌を歌う、そういう場面です。そして、こういう会話がある。

「あなたですか、さっきから霧の中やらでお歌いになった方は」、

「ええ、私です。又あなたです。なぜなら私というものも又あなたが感じているのですから」、

「そうです、ありがとう、私です、又あなたです」。

よく分からないような、まさに禅問答のような話ですけれども。しかし、ここには何か支援活動というようなことをやっていることの大きな意味が現れる、見えるのではないか。自他不二という言葉が仏教であります、そういうことを通じて、自分と他者との間の交流が、お互いが異なるままで近くなっている、そういう場面が生じる。そういうことが経験されているのではないだろうか。そういうことを思います。

鎌田さんの苦々しい顔がいまここで、見ないように私はしておりますが、感じられますので、この辺で終わりにしたいと思います。

○鎌田 どうもありがとうございました。苦々しくなく、にこにこした顔ですが。

ともあれ、私が一番気になっているのは、14時46分を休憩の前にするか、後にするか、それで頭がいっぱい、ちょっとそのところが表情に出ていたのを突かれてしまったようです。時間が気になりますが、ここで休憩をしたいと思います。そして、第2部の頭で、皆さんと一緒に追悼の黙祷をささげたいと思います。

では、よろしく申し上げます。

コメント

大阪大学准教授

稲場 圭信 氏

皆さんこんにちは。大阪大学の稲場と申します。私はスライドを使わないので、このままで話をさせていただきたいと思います。時間が午後2時46分、後半の始まりに追悼がありますので、時間に気を付けながらお話ししたいと思います。

いま、玄侑さん、そして島菌先生のお話、発題がありまして、これを10分以内にまとめるということですが、とてもまとめられないので、どうしたらいいのかと思いましたが。まず、少し振り返りたいと思います。

玄侑氏のお話から、福島にいる方々の苦悩というものが非常に強く伝わってきました。私も、先月末に宗援連の世話人の一人として、福島に行かせていただき、また、福島以外、岩手、宮城といままで何度か回らせていただきました。

やはり、宮城、岩手に比べて、福島の現状というのは、先ほどシンポジウムの前にも、玄侑さんから聞きましたけれども、「1年たっても変わらない」。

「しばらく前はぐずぐずしている感じで、いまはぐちゃぐちゃ、なし崩し的」と玄侑氏が表現される現状は厳しいものと感じます。私も回らせて頂いて岩手、宮城もまだまだ本当に大変な状況が続いていると思いますが、ただ、そういった中であって、少し先が見えるというか、何を取り組んでいけばよいか、復興とはいきませんが、復興の足掛かりになるのかというところがすこしずつ見える中で、福島は、先が何も見えない中に、いろいろなことがぐちゃぐちゃになっているとお話をいただきました。

人は先が見えれば、大変な中にも何か希望を見いだせる。しかし、福島はなかなか先が見えない。私も除染に一度参加させていただきましたけれども、除染の作業によって、ある程度の放射線量が低減された。でも、その表面を削った土を持っていく場所が決まっていないということです。

先日は、伊達市の方に行かせていただきました。国の予算で240億円で除染を8月から本格的にするということになっているようですが、伊達市でお話を聞くと、「置く場所が決まっていない。たぶん、8月になってもできないだろう」と。そういう状況にあるようです。

先ほど玄侑さんが『維摩経』の中に一つ、仏法を助けてくれている魔王という話がありました。困難な中に、どろの中にこそ、ハスの花は咲く、また、野生の王国という言葉もありました。いろいろな動物も危険な状況の中で生きている。そういった中から、新たな仏法というか、道が生まれるのではないかという話でした。

島菌先生からは、これまで個別に宗教者はいろいろな活動をしてきた、今回はそれを横につなぐことの重要性があるのではないかということから、宗援連の活動の始まりがあったということでした。

そして、宮澤賢治の詩も出てきました。賢治の詩の中に、「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」といったものがありました。これは宗教界だけではなく、一般の人、ボランティアの人の精神にもつながっているのではないかと。

私は、震災以降、昨年の 12 月に『利他主義と宗教』という本を出しました。その中で、「無自覚の宗教性」ということを言いました。

これは、日本の中では、7割以上が自分を無宗教だと思っている。しかし、その中にあって、先祖からのいただいた命、また、神仏のご加護によって生かされているとか、おかげさまの念というものは、多くの日本人にまだ根強く残っている、共有されるものではないか。そういった中から、人と人とのつながりの中に、困っている人に対して思いを寄せる、ボランティアというものに、またつながっているのではないかと考えています。

そして、先ほど、宗援連の動きから、また、死についてという話、心のケア、そして、公共空間の中に宗教が現れていること。保養プログラムとか、除染だけではなく、足湯隊とか、いろいろな話がありました。

これを通して感じたのが、仏教の中にある四摂法です。布施、愛語、利行、同時。支援での取り組みというのは、一方的に自分が支援をしているという立場よりも、先ほど、ボランティアに入っている人たちが何か逆に学ばせてもらっている、気が付くことがあるとか、そういった同じ目線、あるいは、下から、足湯などはまさに、下からボランティアに関わるようなかたちですけれども、学ばせていただく、苦に寄り添う在り方もあると感じました。

こういったことを通して考えた中に、やはり、私は持続可能な社会というものを、いま多くの人たちが、日本人だけではないですけれども、考えるときではないかと思えます。

私は、いま 42 歳ですけれども、日本で原発が進められた、その歴史を同じ歩みを歩んできたということです。その中で科学の粋を集めた原発というもの、それが一つ夢のようなものと説かれてきた。

そこには、自然は全て人間がコントロールできる、効率が重視、そういった、また世界観としては個人というもの、そして、市場経済というものが重要視されていく価値観がありました。いま、それが根本的に問われているのではないかと。

そういった中で、宗教というものをどう考えるかということです。私自身は、いまいろいろな宗教を見る中に、やはり救いがなければ宗教ではないのではないかと。これは、宗教社会学では、救済論という、英語で *soteriology* という領域です。

多くの宗教というか、全ての宗教には救いが説かれている。でも、それは、それぞれの宗教によって、救いの意味が異なっている。場合によっては、非常に身近なところと言いましょうか、病気から救われたい、ある宗教によって救われる。経済苦から逃れたい、あるいは、人間関係、こういったものを貧病争と呼んできましたけれども、そういったところからの救いを求める。あるいは、心の面での安らぎを求めるとか、さまざまな救いを求めて宗教に道を見いだそうとする。もちろん、究極的な魂の救済も説かれる。

そして、何か災いが起きたときには、人はどうして自分にこんなことが起きるのか。どうして原発が、福島であのような事故になってしまったのか。女川ではなく、あるいは、いま大飯原発が再稼働していますけれども、そこではなく、自分たちのここで起きてしまったのか。どうして自分がこの地を去らなければならないのか。どうして、自分だけが生き残って、手を引いて一緒に逃げていた子どもが流されたのか。妻が、だんなが流されたのか。そういうふうに生き残った人は、どうして自分という思いを持つわけです。

それに対して宗教はさまざまに、その災いの理由も明らかにしてきた。これは、災因論という災いの元を説く教えがあります。

ただ、一方で、いま震災以後、宗教者、宗教界が、この災禍というものをどうして起きたのかというものに、あまり触れないという状況だと思えます。一方で、宗教がそういうことに言及しなくていいのかという声もあります。

私は被災地を回らせていただいて、仮設住宅、いろいろなところで被災者の声も聞く中に、やはり、原因が分かったところで、そこに救いはない。例えば、理屈といえば、地震がここに起きて、津波が何分後に来る。そして、そういった中でこうなってしまった。科学的に理路整然と言ったところで、どうして自分の家族が命を落としたのか。その説明を淡々としてもらっても、そこに救いはないわけです。

あるいは、宗教的な因果応報とか、そういったことを説かれても、その人の心が安らぐことはない。こういった中で、いま、宗教者が現地で取り組みをされているのは、徹底して苦しみに寄り添うということです。

人によっては、自分の生まれた故郷を離れて、人によっては仮設住宅で。先ほど何マイクローシーベルトであれば大丈夫だとか、駄目だとか、これは個人に任されているという。これが価値観の問題にもなっている。線量が高くても、「自分は大丈夫だ」と言う人もいれば、ほんのわずかでも「絶対に嫌だ」という人もいる。

そういった中で、退く人、去る人も、さまざまな苦悩を持ちながら、そこを去る。残る人も、重いものを背負っている。そういったところに、ただ一緒にいてくれる人、例えば、先ほどの Cafe de Monk のような、お茶を一緒に飲みながらとか、あるいは、身の回りのことを一緒にしてくれるとか、そういう寄り添いの支援があつて、そこに、何らかの救いへの道が何かもたらされているのかもしれない。

宗教というものには、救いがあるものだ、それが宗教である、また、災いについて、さまざまな理由付けをするものも宗教であると捉えられてきた部分もあると思えますけれども、いま、そういったものを越えて、苦しみに寄り添っていく宗教者が多数いらっしゃいます。

これは、実は震災で急に出てきたものではなく、日本社会にあつても、先ほど 1970 年代以降から、人がつながるといふよりは、個別の生きものとして人間が社会の中に生きていかなざるを得ないような、これは、移動性の高い社会になって、生まれた故郷で一生を過ごすという社会ではない中で、社会構造的には、人は一人で生きていくという方にどんどん進んでいく。そういった中で、やはり死というもの、生きるということ、苦しいものを

誰かと共有したい。そういったことが、われわれの中にあると思うのです。

いま、さまざまな自助グループ、セルフヘルプグループがあって、苦というものを体験している人が寄り添いあって、そこに救いを求めるようなかたちもあれば、宗教者の方々が支援活動をしている。そういったいまの世の中です。

ちょっとまとまりませんが、あと1分ぐらいで終わりにします。いま、時代の転換期とされています。これは、阪神・淡路大震災のときも言われました。しかし、その後の17年、18年、私たちの生きる社会は、支え合い、ボランティア社会になるどころか、人をもものように使える・使わないで切り捨てていく、自己責任、新自由主義社会というふうになってしまった。いま、原発問題あり、未曾有の大災害の中で、人が人として生きていくことはどういうことなのかというのが問われている。

こういった中で、宗教というものに対して、人々が目を向けていくという指摘もあります。

20年、30年たったときに、日本社会がどうなっているか、そのときに、「あのとき、お父さんたち、お母さんたちはどういうふうにしてその時代を生きたの。そのときの社会問題を、そして、人々の苦というものをどう受けて、そのときに生きていたのか」と問われたときに、恥ずかしくない大人でありたいという思いを私も持っています。いま、大学で教えていて、若い学生も、そういった思いを持っているので、何か暗い世の中ではありますけれども、そこに希望もあると思っています。

もう時間になりましたので、これぐらいで終わります。ありがとうございました。

○鎌田 とても時間が短いのですが、ここで4分間休憩させていただきます。すみません、中途半端で。第2部が始まって、10分間の休憩をもう一度取ります。14時45分にはお戻りください。一緒に黙祷をささげたいと思います。

(第1部終了)

(休憩)

○鎌田 今、雄勝法印神楽衆の指導者の方々3人来ていただきました。後半のシンポジウムの中で、伊藤博夫会長さんにご挨拶していただきたいと思います。

では、時間がまいりましたので、皆さまと共に1分間の祈りをささげたいと思います。ご起立いただけるでしょうか。

部屋を暗くしてもらって、心を静かに東日本大震災で亡くなった皆様のご冥福と、傷ついた方々の心の苦しみに思いをいたしながら追悼致します。

(祈り)

追悼の祈りを終わります。ご着席ください。

これから第2部に入りますが、その前に、いま伊藤博夫会長さんのご紹介をさせていただきます。実は伊藤会長さんは、私たちが出会ったころは副会長さんでおいででした。

会長の高橋仁夫さんが津波で流されて行方不明という状態でした。その高橋仁夫会長さんは雄勝法印神楽の生き字引と言われるぐらいにたくさんのことを知っていらして、献身的に指導に当たられていました。

昨年の10月10日まで、ご家族の方々は葬式を出すことができない、気持ちの整理ができない、まだ遺体が見つかっていないのでそういう気持ちになれないという心の状態でした。そして、10月11日に葬儀が執り行われました。

そういう中で伊藤博夫さんが次の会長に交代され、雄勝法印神楽が見事に復活しつつあります。そしてそのことが雄勝地域の復興活動の中で大切な意味合いを持っています。

では、ここから、後半に入ります。第2部では、最初に國學院大學の黒崎浩行さんに「被災地の神社と復興の過程」の提題をいただきます。その後続けて、一条真也さんに「東日本大震災とグリーンケアについて」、提題をいただきます。

そして、東北大学教授の鈴木岩弓さんと高野山大学准教授の井上ウィマラさんに続けてコメントをいただいて、討議に移ります。

では、黒崎さん、お願いします。

第2部

報告1

「被災地の神社と復興の過程」

國學院大學准教授・宗教学

黒崎 浩行 氏

皆さん、よろしく申し上げます。

今日、たくさんの方にお集まりいただきまして、私が、このような場でお話しさせていただくなんて大変、申し訳ないなという気持ちが若干ございます。

といいますのも、タイトルで「被災地の神社と復興の過程」ということでお話を致しますけれども、私自身は東京の國學院大學という神道系の大学におりますが、もちろん、それほど大きな被災をしているわけではございません。そういう当事者ではない立場から、どのようなことが言えるのかということは大変、悩ましいところでありました。

ですが、一応、二つの脈絡から、この東日本大震災と神社、あるいは宗教者の関わりについて、何かしら関わらせていただく脈絡といったものがありましたので、まず、そのことを先に触れさせていただいて、それから、ご報告にまいりたいと思います。

一つは、先ほど稲場圭信さんがコメントされましたけれども、彼に誘われて「宗教者災害支援ネットワーク」という Facebook 上のページなのですけれども、そこに、さまざまな宗教者の災害支援活動の情報を流していく、共有していくという活動に誘われました。

これは、被災地には、いないのだけれども、宗教研究者として何かしら、この宗教者の支援活動を皆さんに知っていただく、あるいは、その間の横の連携を図るための一つのきっかけづくりになるのではないかとということで、その活動に参加させていただいたことが一つの脈絡としてありました。

もう一つは、私は國學院大學の神道文化学部というところに所属しております。國學院大學は、東京にあります神道系の大学です。日本には、もう一つ、伊勢にあります皇學館大学という神道系の大学がありますけれども、その二つのうちの一つということで、全国の神職を養成しています。神主さんを養成しているカリキュラムをやっている大学です。

國學院大學には、およそ1万1千人の学生がいるのですけれども、そのうちの109人の学生が、実は津波、あるいは原発事故の被災地に実家があつて被災をしました。神道文化学部でも11人の学生が、実家が被災したということで、大学としては、その学生たちの支援といいますか、学費減免等のサポートというのを行ったわけです。

私は「神社ネットワーク論」という科目をこの神道文化学部で持っていて、現代のさまざまな課題を持っている社会と神社というものが、その状況に巻き込まれながらも、どういう取り組みをしているのかということ、さまざまな具体的な事例を紹介しながら学んでいくという授業を10年間続けておりました。

けれども、この東日本大震災に遭って、その被災地の神社、あるいは全国の神社界全体が、どのような支援の取り組みをしているのか、また、そこから、どういうことが学べるのかということについて、ぜひとも、この機会に学ばせていただきたい。もちろん、そこに、どのようなかたちで支援をさせていただけるということも含みながら、学ばせていただきたいということがありました。

それで、昨年5月ぐらいに、そういった一つの研究プロジェクトを、学部のほかの二人の教員と共に、共同研究というかたちで立ち上げて、現地調査、現地でお話を伺うということをやってまいりました。

今回、お話し申し上げますのは、その二つの脈絡の中で、いろいろ学ばせていただいたことをお話しすることになります。

先ほどの玄侑宗久さんのお話の中で「乖離」ということがございました。福島において、出ていくのか、あるいは、とどまるのかという状況の中での、一人の精神の中での乖離もあるでしょうし、コミュニティの中での乖離もあるかと思います。そういった問題。それから、自然との関係の中で「敵対と共生」というキーワードもあったかと思います。

そういったことにも、今回お話しすることというのは関係があるのではないかとはいまになって思いますけれども、現時点では、なかなか、まだ整理がつかない状況でお話しするというのを、最初にお断りさせていただきたいと思います。

また、プリントの「はじめに」のところに、二つのアプローチを書いておきました。これは、一つは、私も現地にお話を伺いに足を運ぶことを何度かさせていただきましたけれども、本当に深いところまで入って、その方たちが、どのように被災者の方たちの心の支えになっていったのかを本当に聞いたのかということ、何か、やっぱり心もとないところがあります。

そういったことに関してご関心のある方は、実は今日、会場にもいらっしゃるのですが、川村一代さんという方が書かれた『光に向かって』という本が今年の4月の末に出版されております。そちらを、ぜひお読みいただきたいと思います。

本当に神職の方、あるいは宮司夫人さんの方などが、被災地で避難されてきた方や、さまざまな方と心を通わせながら支援を行っている姿が描かれておりますので、そういったところもぜひ、ご関心のある方は、お読みいただければと思います。私は、まだまだ、そこまで入り込めていなかったような気がしております。

また、もう一方で違うアプローチとして、では、社会の側が、どれだけ神社や祭りというものを、この災害に遭って、支えとして必要としているのかを、どちらかというところから見つめ直すという立場もあるかと思えます。なかなか、その立場も重要なことだと思うんですけども、それをしっかりと客観的に検証するところまで、まだ、この1年の中では私自身は至っておりませんでした。

そういったことも踏まえながら、若干、中途半端でありますし、取りあえずのところではありますけれども、現地を歩かせていただき、また、いろいろな資料、データ等も参照させていただきながら、今日のお話をさせていただきたいと思えます。

まず、神社本庁では震災対策室というものを設けて、各地の神社の被災状況を調査し、また、神社それぞれに対して義援金を届ける。あるいは、さまざまな神社本庁の定めている規則、あるいは法的な問題などへの解決の糸口を模索している。そういう状況があります。

こちらは、昨年の12月に月刊『若木』という神職向けに発行されている冊子、定期刊行物に載せられているものですが、この東日本大震災の被災地において、どのような数、規模で神社の被災があったのかを示しているものです。

お手元のプリントの1ページ目のところに、被災3県と呼ばれる岩手県、宮城県、福島県の状況を数字で抜き出しておきました。

福島県のところの右側の欄に※がありまして、そこには「本殿・幣殿・拝殿の全壊・半壊」の横に「243」という数字があります。これは、先ほど玄侑宗久さんも触れられましたが、警戒区域にあつて実態が確認できない神社の数が243社あったということです。

今年の4月に警戒区域が狭まりまして、立ち入りができるようになった地域がありますので、この243は、もう少し減ったとは思いますが、昨年7月段階での数値としては、243社が、どのような状況にあるのか、立ち入ることもできないので分からないという状況であったということです。

そして、『神社新報』という毎週1回発行されている神社界の新聞がありますけれども、そちらでは、昨年の3月21日号から8月15日号にかけて、個々の神社が、どのような被災状況にあったのかということ、びっしりと掲載しておりました。

ただ、その中で分からなかったこととして、特に沿岸部の神社で、津波から避難してこられた方を受け入れて一時的な避難所となったこと、あるいは、炊き出しが、その神社の境内で行われたということが新聞等でも報道されておりますし、神社界でも、そういった情報は共有されているのですけれども、それが、どれぐらいの規模だったのかは、あまり実は数値としては把握されていないように思います。

この津波被災地、特に三陸において、もともとの神社の位置が津波到達ラインより少し内陸寄りであって、そういったことで避難者を受け入れることができたのだという研究も出てきてはいますけれども、この点も少し客観的な検証が必要なところではないかと思えます。

これは、その「宗教者災害救援マップ」という、稲場さんたちと一緒につくっているものです。こちらに、地図上で分かるかたちで被災状況、これは神社に限らず、ほかの宗教施設も、どのようなかたちで被災しているのか、それから、避難している方をどれだけ受け入れているのかを示す地図を昨年からつくっておりますけれども、その中で、いくつかの神社で、直接伺ってお話を伺うことができました。

一つが、紫神社という気仙沼市の南町というところにあります神社です。こちらで避難所を運営している代表の方にインタビューを行いました。

こういった高台にある神社でして、この下には、このようなかたちで商店街等が広がっているところでした。ここを津波が押し寄せて、人々はこの階段を上って境内に、およそ140の方が避難されたそうです。

町ぐるみで避難してこられたので、その町の自治会長さんですとか、あるいは商店街の青年会長の方も、ここにいらっしゃって、この方たちが中心になって避難所としての運営を行っていったそうです。

二日目から毎朝、朝礼をした。そして、夕方には反省会をして、それで避難されている方一人一人に行政からの連絡事項が届くようにしたということだそうです。

このようなかたちで、これまでの自治会のつながりというものが、すっかり境内に移ったことで、さらに山の上の方には指定避難所となっている小学校があつて、そちらの方にたくさんの方が避難されていたのですけれども、そちらから、また、この境内に戻って、「やっぱり、ここの方がいい」と言ってこられる方もいたそうです。

その前に、8月に、いったん、もう、この避難所は解散するのですけれども、それ以降も、この自治会長さんは、ここにとどまって、この町の復興計画を練る、ある種の作戦基地のようなかたちで、この境内を活用していらっしゃいました。

9月17日、9月18日には紫神社のお祭りが行われたそうですけれども、それに先立って、この避難所でお世話になった方たちは屋根の塗り替えを行ったそうです。

これは、紫会館という社務所、直会等を行う場所として活用されてきた施設。その手前にはテントを張って、避難所として運営してこられたところです。

こういったところから、地域コミュニティというものが、もともと持っていた相互扶助というものを、神社の境内が活性化する働きがあったと言えるのではないかと思うんです。しかし、先ほど申し上げたように、これが、どれぐらいの広がりを持っていたのかは、もう少し、じっくり客観的に検証してみる必要があるかと思います。

次に再生・復興ということが言われているのですけれども、これも、冒頭から玄侑宗久さんが、非常に、いま困難な状況にあるということをおっしゃっておられました。私も、そのような認識でおりますけれども、その困難さと、どのように向き合っているのかを、少しお話しさせていただきたいと思います。

お祭りですとか神社の再建ですとか、あるいは、さまざまな民俗芸能、こういったものが、被災地において人々の絆を活性化し元気づけている、そういったことは、よく言われております。そのさまざまな事例も、私も足を運んで見させていただいてきました。そういった幾つかの事例について、お話をさせていただきたいと思います。

一つは、これは相馬市に山田神社という神社がございました。ここは昭和16年に八沢浦干拓事業というものが前にあって、その事業の功績をたたえて、山田貞策を祭った神社として相馬市に創建された新しい神社です。昭和16年に創建された神社です。ところが、ここは津波で流出してしまいました。

そこに、南相馬市の方にボランティア活動に来ていた熊本県の神職の方が、この津波で流出してしまったという状況を聞いて、ご自身の地元であります熊本県に球磨工業高校という高校がありまして、そちらでは伝統建築コースという、これは全国で唯一宮大工を養成するコースを設けている工業高校ですけれども、そちらの生徒たちが製作した祠を、仮社殿として寄贈したいということを思い付いて、そのことをその校長さんに提案しました。

また、地元の方、氏子さんたちも、そのことを了承して、新しい鎮座地を、もともと、この山田貞策の家があり、また、記念碑も、そこには、たくさん建てられている磯ノ上公園というところがありますが、そちらに新たにその仮社殿を遷座し、そこで復興を誓うお祭りが今年の2月に行われました。

2月には、まだ、こういうかたちで雪が降っておりました。右側に見えますのが海岸です。この海から津波が来て、この農地があったところは塩害、それから、30キロ圏より、もっと離れておりますけれども、放射能による影響もあって、なかなか、この農地の復興は難しい状況にあるわけです。

けれども、こういったところで遷座祭においては、この高校生たちも一緒にやってきて、仮社殿を運んできて、また、鳥居も新しくつくって建てました。地元も神職の方たちが集まって、その遷座祭を行いました。

これは今年の春、4月の例大祭のときに、また伺ったときに撮影した写真です。雪は、なくなっておりますけれども、やはり、この農地は、まだ荒れた状態でありました。これ

は、かなり長い期間をかけて復興していかなければいけない状況にあります。

また、熊野神社という神社が女川にあります。こちらは地域医療センター。もともとは町立病院だったのですけれども、津波が来た後に町立病院は、いったん廃止されて、地域医療センターという官民融合の医療機関に変わりますけれども、その医療センターの、さらに上のところにある神社です。

こちらは春に例大祭というのが毎年、行われているのですが、このみこし担ぎのボランティアを外から募るということを行いました。本来は、おみこしは氏子さんのみが担ぐものでありますけれども、こういう大変な状況だからということで、女川に来ていらっしゃるボランティアの方たち、また、インターネットで、さまざまな方に呼び掛けて、みこしを担ぐということが行われました。

鷺神浜という女川港があるところですが、こういうかたちで、津波で全て流されているところです。

当日は、大変な暴風雨だったのですけれども、130人ぐらいの方が集まって、大人みこし、それから、東京から寄贈された子どもみこしを担いで、このようなかたちで、ほとんどさら地になってしまったような場所、それから丘の上にある住宅地を巡ってまいりました。

地域医療センターの中から撮った写真。このようなかたちで、ここにいらっしゃる老人の方たちも、この様子を見守っておられました。

また、このレジュメには載せておりませんでしたけど、5月5日には鎌田東二先生、須田郡司さんたちと一緒に雄勝町大須地区の八幡神社の例大祭に伺いました。

ここでは大人みこし。このみこしの担ぎ方は、私も行って驚いたのですが、ものすごく揺らすんですね。そして、「チョウサイ、チョウサイ」という声を掛けながら揺らしていく。子どもたちも、こういうかたちで、みこしを担いでいました。

先ほど鎌田先生のスライドにもありましたけども、浜降り神事も行われました。

それで、雄勝法印神楽が奉納されるわけです。その前に祭典がありまして、実は、ここに写っている、この緑色の服を着た若い男性は神道文学部の学生です。このお祭りに駆け付けて、何かできることはないかということで、この祭典のお手伝いをしていました。

これは「初矢」という、一番最初に舞われる舞です。これは大須小学校の児童たちが、このように舞っておりました。雄勝法印神楽の様子です。

それから、八重垣神社という神社が宮城県の山元町にございます。こちらは、やはり津波で流されてしまいました。住宅地、または農地だったわけですが、津波の被害を大きく受けて、神社もろとも、この地域一帯は流されてしまいました。

この地を、これも玄侑宗久さんのお話の中にもありましたけども、震災の木質のがれきを使った防潮林をつくるプロジェクトが宮脇昭先生らによって提唱されて、この八重垣神社の鎮守の森の復活も、その考えに基づいて行われるということで、6月24日に、その植樹祭が行われました。

このときに、これは私が渡された、ここの植樹ポイントでやってくださいと言われて、

私は2番の植樹ポイントでやることになったわけですが、その際に特徴的だったのは、このようなかたちで、午前中に地域の氏子さんたちだけが集まって、リーダー講習というものを宮脇昭先生が直接、指導してやっておられたことでした。

ここに集まっていらっしゃる十数人の方が、先ほど、ちょっとお見せしました11の植樹ポイントに分かれて、それぞれ、当日500の方がボランティアとして集まってきたのですが、その人たちに声を掛けながら、植樹をやっていくといったかたちを取ったということです。

こういったかたちで地域における神社、あるいはお祭りの復活が、地域を超えた支援を受けてはいるのですが、しかし、それはローカルな宗教文化の伝統を自立的に保存、継承しようという地域コミュニティの意志が、そこに伺えるものとなっていたように思います。しかし、それは同時に、これからの地域の再生・復興の困難さと向き合うものとならざるを得ないと思います。

先ほど挙げました八沢浦干拓地。現在、八沢土地改良区と申し上げますけれども、ここは明治39年から約30年間をかけて干拓事業を行ってきたところです。その後70年に渡って水田耕作を営んできた地域ですが、その100年間の蓄積が津波、原発事故によって失われてしまったということです。

この南相馬市の復興計画にあたっては、ここ八沢浦干拓地を農地として再生させることを、その土地改良区の方たちは名乗りを上げましたけれども、それは、これから先、非常に長期にわたるものになると思われれます。先ほどの山田神社での復興の誓いは、そういった長期にわたる復興を願う、そういったものとならざるを得ないという事情があります。

また、山元町の八重垣神社の場合は、イチゴ農園の再生が、すでに一部、始まっていますが、防波堤が現在のところ壊れております。ですので、建築規制が掛けられていて、新しく家を建てることはできない状況です。

すでに何とか建っている家を譲ってもらって、そこに住む方も若干名は、いらっしゃるようですが、それは非常に困難なことです。住民が戻ってくるのは非常に難しい状況にあります。

この八重垣神社のすぐ近くにある、笠野地区の住民は集団移転を決めたそうですけれども、この土地を離れていく人たちもいらっしゃる。そういう人たちであっても、楽しく集まれる場所として、この鎮守の森、あるいは祭りを大事にしたいと、八重垣神社の宮司さん、藤波祥子さんは、おっしゃっていらっしゃいました。

また、いわき市に久之浜というところがあります。こちら津波で多くの住民が亡くなり、家も失われたところですが、ここには諏訪神社という神社がございます。この諏訪神社は、この地域は、実は行政もボランティアも、なかなか入りにくかったところですが、この諏訪神社が一つのボランティア拠点になって活動されていました。

こちらでは、宮司さんの高木美郎さんという方が非常に尽力されてボランティア活動がされていたのですが、地元の方たちの被災の生々しい体験、また、行政の防災計画、

ここはもう立ち入り禁止区域にしたいという行政との葛藤、また、原子力災害での不安の中で、住民たちが住んでいた土地を離れるにしろ、とどまるにしろ、神社を正常に保って、それを継続していくことが、ふるさとを守ることになるのだと語っていただきました。

これは、学生4名とともに、被災神社の復旧活動を手伝わせていただいたときの写真です。

これは星廻宮神社という、その諏訪神社の宮司さんの兼務神社ですけれども、こういうかたちでさら地になってしまったところですが、仮設の社殿が建っており、その境内を清掃しているところです。また、稲荷神社は社殿が奇跡的に残ったのですけれども、ここも雑草を取ったりということをしました。

最後に、被災直後、神社は、さまざまな支援を受けながら、地域住民の自立的な相互扶助の場として機能したと思われまます。また、再生・復興の困難さを地域と共に抱えてきております。その中で、ふるさとというものの意識を未来につなぐ役割を果たしていることが、幾つかの事例からは伺えるのではないかと思います。

ただ、その検証は不十分ですし、また、原子力災害の影響、あるいは被災地におきまして、神職の方々が、どれだけの困難を抱えていらっしゃるのかについても、十分には今日お伝えできなかったかと思ひます。

こういったことも、これからの課題としながら、実は、こういった分野に関して、地理学ですとか、津波工学ですとか、さまざまな分野の方たちが、これからの提言も含めて、研究調査活動に入っているらしいです。そういった方たちの知見なども参考にしながら、被災地の再生・復興における神社の在り方に、これからも学んでいきたいと思ひます。

以上でございます。ありがとうございました。

○鎌田 どうもありがとうございました。

まとまったかたちで、被災地の神社がどういう役割を震災後果たしていたかということを考える材料と問題点について、提起していただきました。

続いて、一条真也さんに、東日本大震災とグリーンケアについて話をさせていただきます。お願いします。

報告2

「東日本大震災とグリーンケアについて」

株式会社サンレー社長・北陸大学客員教授

一条 真也 氏

こんにちは。一条真也と申します。私はいろいろな本を書いているんですが、どういう

テーマかというところ、「日本人の心」を一つのテーマとしております。

私は、日本人の心というものは大きな三つの柱、神道と仏教と儒教によって支えられていると考えています。その3つの宗教が、日本人の心にデザインされているのかなど。これは聖徳太子が最初にデザインしたのではないかと思うんですが、このたびの「こころの再生」に向けては、神道も仏教も儒教も総動員しなければいけないと思っております。

今日は、神道のお話も先ほどありましたし、玄侑先生から仏教のお話もあったのですが、私は、どちらかというところ普段から儒教に親しんでおります。北陸大学でも客員教授として「孔子研究」の授業を担当しており、儒教を教えているのですが、実は、孔子のお母さんが葬儀の仕事をしていたと言われております。

そして、「礼」を追求したということで、お弔い、葬儀ですね。それも、また私の本業でもあるのですが、冠婚葬祭業をやっております。結婚式のほうも、もちろんやっているのですが、葬儀も年間1万件以上、お世話させていただいております。

私は全国の冠婚葬祭互助会の全国団体の副会長もしてまして、被災地では、いろいろサポートをさせていただきました。そして、さあ、私も現地に入って陣頭指揮を取ろうと思っていたときに、尾道で神社の石段から転げ落ちて足を折ったんです。それで被災地に入れなくて。

2カ月ぐらい動けなかったのですが、悶々としまして。もう自分も何十年、生きてきて、こんなに間が悪いことはない、業界の仲間みんなが先に入って、どんどんやっているのにと非常に悔しい思いもしたのですが、ここで、いろいろなことを思って、自分に来ることをやりました。それから、骨折が治ってから被災地にも何度か入りました。

そういったところで、なぜ私が東日本大震災でグリーフケアの話をするかといいますと、グリーフケアというのは、いろいろな、医療従事者であるとか、宗教関係者であるとか、いろいろやっているのですが、アメリカではお葬儀屋さん、葬儀業界の人々が一番熱心に行っているんです。

私どもの業界では、私の会社がグリーフケアを国内で最も早く始めたと言われていて、自助グループのサポートなども行っていますので、それを今から全国的に普及させていきたいと思っております。

この会場におられる方で「グリーフケア」という言葉を初めて聞かれた方は少ないのではないかと思います。最初に簡単にご説明します。

グリーフというのは「悲嘆」ということですね。グリーフ（悲嘆）のケアは、「子ども・配偶者・親・友人など大切な人を亡くし、大きな悲嘆（グリーフ）に襲われている人に対するサポート」ですね。死別で起こる悲嘆の反応は時には不眠や食欲不振、あるいは「うつ」につながるとされています。

日本人の自殺が多いということが、ずっと言われていますが、日本における自殺者の数は、14年連続で3万人以上となっています。

自殺の原因は、もちろん、いろいろあるのですが、大きな原因として言われていま

すのが「うつ」です。うつが非常に大きな原因と言われています。

特に、配偶者を亡くされた方が、うつになる確率は非常に大きいそうです。私どもも、いつも葬儀の現場から見ていて、それは同感です。

このような「うつ」の危機に直面したとき、グリーフケアが必要となります。

グリーフケアでは、対象者が事実を受け入れ、環境の変化に適応するプロセスを支援するのです。グリーフケアは、1960年にアメリカで始まったとされているのですが、欧州のイギリスやドイツでも、いま非常に盛んであります。

誰がグリーフケアを行うかということですが、先ほども言いましたように、まずは、医療の関係者です。医療従事者、心理士ですね。そして宗教家、グリーフケア協会・団体とか。

「自助グループ」が、いま一番、重要だとされています。「フューネラル」は葬儀という意味ですが、フューネラル業界では公益社さん。大阪に本社がある公益社さんが「陽だまりの会」という自助グループを最初につくられたんです。

互助会の世界では、私どものサンレーが「月あかりの会」という自助グループをつくりました。いま、自助グループで、奥さんを亡くされた人の会であるとか、反対に御主人を亡くされた未亡人の会とか、小さなお子さまを亡くされたお母さまの会であるとか、いろいろ、そういった自助グループを立ち上げるということも行っております。

東日本大震災に先立って、やはり1999年、阪神・淡路大震災が非常に大きな出来事だと思うのですが、これとの大きな違いは、阪神・淡路大震災は「ボランティア元年」と言われたんですね。このときに初めて日本にボランティアが本格的に根付いたとも言われているのですが、137万人の支援者が現れたそうです。しかし、阪神・淡路のときには「グリーフケア」の問題は、あまり言われなかったですね。

といたしますのも、東日本大震災における死者の発生の仕方が、地震以外に津波が非常に悲惨な悲嘆を生んだわけですね。そこで初めて日本にもグリーフケアというものが必要ということが言われてきました。

この未曾有の大災害と最悪の、「最悪」と一概に言うてはいけないのですけども、21世紀になって土葬が復活したというのが、まさに「あり得ないこと」でした。

これに先立って1年前、「日本人のこころ」における大きな出来事がありました。「無縁社会」という言葉が流行し、島田裕巳さんという方が『葬式は、要らない』という本を書かれた。この2つは2010年の1月に同時に生まれた言葉なんですけど、NHKスペシャルで「無縁社会」が放映され、『葬式は、要らない』が同じ月に発刊された。

私は「無縁社会」と「葬式は、要らない」は同義語ではないかと思っていたのですが、その1年2カ月後に、津波と共に「無縁社会」も「葬式は、要らない」も消え去ってしまったのではないかなと思っております。

ちなみに、私は『葬式は、要らない』に対して、『葬式は必要!』という本を書きました。また、「無縁社会」に対しては『隣人の時代～有縁社会の作り方』という本を書い

ております。

さて、「被災者の中でケアが必要な人、行われるケア」ということですが、被災者の中で心理的サポートが必要な方は誰か。まず大切な人、家族を亡くした人、愛する人を亡くした人。で、安否不明者の家族。これがまた非常に大きいんですね。高齢者、子ども、障害者、旅行者、外国人ということですね。

「被災者の中で行われるケア」は、「遺族のグリーフケアの対応」、「被災者、被災地移住の精神的不調、ストレスへの対応」、「被災地での支援活動、ケアを行っている方々の精神的ケア」などですね。これも、また非常に重要ですけども、今日は時間がありますので、ちょっと端折ります。

それから、「被災地の避難所、被災した現地医療機関の機能の支援」ですね。「東日本大震災では、家族の喪失、生命の脅威、悲惨な光景の目撃などを経験した被災者が多く、さまざまなストレスの対応策が必要である」と。

グリーフケアというものは、失ったものを、どうケアしていくかということなのですが、普通は、愛する人を亡くすということがあります。

東日本大震災をはじめ、さまざまな災害では、「複合悲嘆」、「複合喪失」ということが言えるのではないかと思います。有吉佐和子さんの『複合汚染』という本が昔ありましたが、複合悲嘆。これは、さまざまな悲嘆で、同時に、いろいろなものを失ってしまうことです。まず1つは、「大切な人、愛する人の喪失—配偶者、親、子、恋人、友人」とかですね。死者が1万6千人近く、行方不明者も3千人近くいます。

実は、東日本大震災の後、私どもの業界では柩を2万個用意して、現地に送りました。

しかし、柩を苦労して集めても、あまり役には立たなかったんです。海から上がったご遺体は、もう柩では対応できなかった。袋ですね。納体袋というものがあるのですが、それも全国からかき集めても全然不足して、これは、やはり、いままでにない未曾有の大惨事だという実感がいたしました。その中で、どのように「人間の尊厳」というものを守るかが問われたように思います。

これが大切な人を失うということですが、「所有物の喪失」ということもあるわけですね。家とか車とか船とか会社とか。仕事もそうですし、職場とか、ペット、家畜ですね。福島でもそうですけども、家畜を失うと。

そして「環境の喪失」。故郷を失う、避難による越境、あるいは慣れない土地へ移ること、転勤とか、いろいろなことがあります。

役割も失ってしまったと。職場での地位とか、家族の役割を失った。意外と東日本大震災の後に離婚した夫婦が多かったんですね。いろいろ、やっぱり環境の変化があったのではないかと思います。

そして、「自尊心の喪失」。これも大きい。避難生活ですかね、孤立感とか。名誉とか、いろいろなものが傷ついていってしまったと。

そして、「身体的損失」。命に関わる負傷もありましたし、けがや病気による衰弱もあ

った。精神的、睡眠なども失われてしまった。重軽傷者が6千人。いまでも、いろいろな被害があると思います。

そして、「社会生活における安全・安心の喪失」。これは、いま福島以外でも、日本全体が安全・安心を失ってしまったということが言えるのではないかと思います。

ということで、普通は何かを喪失したときには、それ1つを失っただけでも大変なことです。東日本大震災の被災者の方は複合して、家族も失って、家も失って、車も船も全部、失ってしまったと。安全・安心も失ったというようなことが言えるのではないかと思います。

いまのは「複合」でしたが、今度は「複雑」です。

「複雑性悲嘆」ということで、深い悲しみが、ずっと長引いて回復が、なかなかできない。そして自責の念、罪悪感、否定的な考えが回復を妨げていく要因となっていると。

「生前中はずっと良くしてあげればよかった」とか、「自分のせいだ」と、「自分だけ幸せになってはならない」のだと思って、「愛する人と一緒に死んでしまえばよかった」、「生きる意味がない」とか、「通常の日常生活が送れない」、無感覚、無力、自分は駄目だと思う。「不公平である」。何で、あの人は生きていて、うちの家族は死んだんだ、何で、うちの家族が死んで、私が生きてるんだとかですね。「不公平である」、これも非常に大きいです。

「誰も理解できるはずがない」と「他人を信用できなくて」、「愛する人の死を受け入れてはいけない」と最後、思うということは非常にパニックになっていると。

このたびの東日本大震災で葬儀業者が、どういうことをやったか。

物資の供給や衛生面の配慮も重要でしたが、何よりも人的支援ですね。要するに、海から上がったお遺体をきれいにするという、「エンゼルメイク」と言うのですけど、そういったこともありました。そして、納体袋安置とか。さらには、「慰霊、鎮魂、供養、祈り処」、スペースを設置するというのも、非常に重要なことでした。

いろいろな災害があるのですが、お葬儀のお世話をさせていただいて、遺族の方から、これだけ「ありがとうございました」と言われたことはなかったと、本当に、みんな言っていました。

この私が、ずっと足を折って動けない間に、被災地の方にどういうお言葉を掛けたらいいか、何ができるかを書いたのが、『のこされた、あなたへ』という本です。

「あなた」といっても抽象的な「あなた」ではありません。「葬儀ができなかったあなたへ」、「遺体が見つからないあなたへ」、「お墓がないあなたへ」、「遺品がないあなたへ」、「それでも気持ちのやり場がないあなたへ」ということで、「ないないづくし」なんです、本当に。これも津波という災害の特性が、全てを「ないないづくし」の状態にしてしまったということが言えるのではないかと思います。

これに先立って、私は、『愛する人を亡くした人々』を2007年に書いたのですが、ここで、いま私のところのグリーフでも実践しているのですが、要するに、これは、いろ

いろな発想法があるということなんですね。

私は宗教家ではありませんので、例えば、この儀式とか自然、命とか、キリスト教の天国という考え、仏教の考えもある、ヒンズー教の生まれ変わりとか、いろいろあります。そして、スピリチュアリズムも含めて、こんな考え方もあるんですよ。

そして、愛する人を亡くされた方の世界観とか信仰に合わせて、こんな考え方もあるとご紹介して、ずっと話をしていくということ。決して特定の思想や考えを押し付けることはありません。

ここで大事なのは、「愛する人」と一概に言っても、いろいろな「愛する人」がいるということです。これは、私が非常にいつも肝に銘じており、また、スタッフにも言っているのですが、愛する人を亡くした人が何を失うのかということ。これはユダヤ教のラビであるグロフマンという人が言っているのですが、「親を亡くした人は過去を失う」「配偶者を亡くした人は現在を失う」「子を亡くした人は未来を失う」「恋人、友人、知人を亡くした人は自分の一部を失う」ということで、皆さん、微妙に少しずつ失ったものが違うのだから、同じように十把ひとからげに「ご愁傷さまです」の話ではないと。

非常にデリケートな問題ですから、そこをどう接していったら、どうグリーフケアを行っていくかをいつも模索しながら考えております。

そして、私どものフューネラル業界でできる、さまざまな実践術が、お葬儀を起点としまして、その前と後で、いろいろ違うのですが、葬儀前、終末ケアもありますけど、生前準備のケアを、エンディングノートなど、いろいろ使ってやると。

そして、遺体のケア。これが東日本大震災でも発動したのですが、エンゼルメイク、エンバーミングや湯灌とか納棺ですね。

そして、遺族のケア。ここが非常に重要で、いま非常に重点的にやっているのですが、「遺族の精神・身体的状態を察した、快適安心な時間と空間の提供」ということですね。「葬儀中のケア」ですが、本当に「儀式がどうしても必要なのか」「なぜお葬式というものを行っているのか」を考えることが大切です。法事、四十九日、一周忌、初盆には、どういう意味があって、どうして行っているのかを、宗教家の方と僧侶と一緒に考えていくことが必要ではないかと思えます。

それから「会葬者のケア」があって、お葬式の後も、葬儀後のケア、死後の諸手続きとかもあります。

「喪のケア」。法事法要、慰霊、鎮魂、供養、手元供養、仏壇、墓地、散骨。

いま一番、力を入れていることが自助グループ (Self Help Group) を立ち上げていって、サポートしていくということです。

自助グループをつくってサポートするということは、まず「愛する人を喪失した対処から、愛する人のいない生活への適応のサポート」をするということですね。

本当に、愛する人がいなくなるということは、時間や空間の感覚が歪んでしまい、異次元の世界になってしまうと思えます。

葬儀というものも、歪んだ時間と空間をいったん破壊してしまっ、また新しい時間と空間を創造して、そこで、また生きていくスペースをつくる、そういう意味があるのではないかと考えています。

愛しい者が死んでも、ずっと、そのままでも何もしないで日常生活を送ろうと思っても、そうはいかない。やはり心が悲鳴を上げてしまし、異次元に向かって開いた穴に落ちてしまうのではないかと考えています。

「人生の目標」とか、「喜び」、「満足感」。言葉で言っても、なかなか、うまくいかないですけども、このようなものを提供することを目標にしております。

「自分自身をケアすることをすすめる」、「他者との関わりや交わりをすすめる、自律感の回復を促す」していくと。

先ほども言いました、サンレーでは「月あかりの会」というものを実際につくって活動しております。そこで、「癒し」「集い」「学び」「遊び」といった大きなテーマが4つあります。

「癒し」は、「大切な人を亡くし、深い悲しみにある人が、きちんと悲しむことができ、そして前向きに生きていくことができるように安心感を与え、支え、癒しに役立つものを紹介」していこうということです。

具体的には、「悲嘆している人に安心感を与え、不安を軽減させるため、遺族に対しベストをつくす」のは、アロマセラピーとか。香りですね。あとは音楽セラピー。音楽によって癒やす。その人の精神状態にマッチした音楽を紹介していくと。

それから「手元供養」という、最愛の人をいつも近くに置いておくことができる供養の仕方を提案する。

本も、絵本などをはじめとして、その人の気持ちに合った、愛する人の死と向き合う何かのヒントが生まれる1冊の本を紹介していくことをやっております。

カウンセリング。専門家によるカウンセリングとカルテを作成して、遺族が質問できる環境をつくっています。そして、遺族の思い出を引き出して、あらゆる質疑応答に関して正直な気持ちで対応すると。

それで、イベントですね。皆さん、遺族の方々が、いろいろ集うイベントをいろいろ企画して、やっております。

「集い」ということで会食や、慰霊祭、月例会を開催して、同じような境遇の人、配偶者を亡くした人とかお子さんを亡くした人とか、同じような境遇の人が集まっていく、そういう場を提供させていただいております。

同じ境遇の方々が集い、つらい気持ちを共有し、参加者全員で故人を偲ぶ機会をつくる。同じ境遇の方々と、会食する。これは、やっぱり食事をすることが大事ではないかと思うんですが、故人の思い出を話し合っ自分の状況を把握すると。

「死別に対する意味付けを与える」。これも、なかなか難しいんですけどね。カウンセラーなどが「上から目線」で話しても聞かない場合が多いです。それは、やはり同じ体験

をされた方が、「私も夫を亡くしたんですけど」というふうな自分の体験として話していただくと、非常に効果が大きいですね。死別に対する意味付けを与え、悲しみや、つらさを受け止める機会として、「故人は私と人々の中にいる」という確信を持つ機会。

月例会を開催して、葬儀後のフォローとして遺族を支えていくと。そして、お坊さんをはじめ、宗教者の法話やコンサートを開く。こういったことをやっております。

この「学び」ですが、セミナーやカルチャースクールなんかも開催しています。共通の趣味の方々と主に学んでいくということが、また新しい生きがいがづくりというか、そういうことですね。新たな趣味の発見のお手伝いをすると。人生の目標、生きがいがづくり、将来設計のお手伝いというようなこともあります。

また、親しい人が亡くなられたわけですから、その供養についての話などもします。いまから、どうやって法事があるのか。そういうお話になると本当に皆さん、熱心に聞いていただいております。そして初盆を迎えるわけです。

最後は「遊び」です。「遊び」と言うと、ちょっと不謹慎なような感じもしますが、「このころの再生」においては非常に遊びが重要だということですね。四季の移り変わりを感じるということで、よく旅行などを企画するのですが、バスハイクなんかで、よく行っています。外に出るきっかけをつくり、体を動かして健康に気を配ると。

新たな夢や希望、喜びや生きがいがづくり。このような言葉だけを口で言うと、私も何か虚しい気もするのですが、実際に、そういったものがグリーンケアの自助グループの活動現場の中から少しずつ生まれつつあるということは実感しています。

そして、「定期的に自分を甘やかせることができる場を提供する」と。これも大事です。ということで、会員同士の皆さんも、自助グループの皆さんの縁を新たに結んでいく機会を提供するということをやっています。

これは、その自助グループの皆さんの意見をまとめて、「悲しみを癒すための10ヶ条」というものを月あかりの会では、やっています。

「孤独感から救われて、自分だけではないと気がつくことができる」と。愛する人を亡くした人は、私一人ではないというふうに、「安心感が得られ、気持ちにゆとりが生まれる」。

「同じ悩みや、問題を抱えている他の人の話に耳を傾けることによって、そこから自分を見直す機会や方法を学ぶことができる」。「悲しみや、辛さから逃げないで受け止め、悲しみに対して素直な気持ちをほかの人に伝えることができる」。「参加することで、生き生きとしていく他の人の姿をみて希望を持つことができる」と。私もあんなふうに、いつかは元気になれるのかなど。

「自分にとって必要な情報を得ることができる」。この「必要な情報」というのが大事で、本当に深い悲しみは、いつまで続くかみたいなことも実は大事です。

これは本当に、いろいろな方がいますから、一般論でしか言えませんが、普通、配偶者を亡くした悲しみは3年は続き、お子さんを亡くした悲しみは10年続くと言われてい

ます。これは本当に一般論ですけども、そういったことを情報として得ると。それで、あと1年、あと1年ということで、自分を励ましていくことも大事ではないかと思えます。

「体験がどのように自分に位置付けられていくかなど、他の人とのお互いの成長を分かち合える」と。「仲間を大切に思う気持ち、仲間を尊ぶ気持ち、自分が大切にされる喜び、自分が尊ばれる喜びと。自分自身を大切に思う気持ち、自分自身を尊ぶ気持ちが育つ」と。

「将来の目標や意思表示が明確にできて、あきらめないで信じていくことができる」。「仲間とともに、時間をかけて悲しみや不安感を軽減していくことができる」ということですね。

もう本当にグリーフケアは技術論ではないと思います。こういうことをやって、こういうことをすればいいというような、テクニックで語っては本当はいけないような気がしますが、やはり、やってはいけないことはあるんですね。それで、いつも気を付けていることを、ちょっと最後にお話ししたいと思います。

ご紹介するのは、「グリーフケア・スタッフ心得」です。死別した人へ、こういう言葉を掛けてはいけないというものです。「励ましや激励」。「頑張って」とか、これはもう、この東日本大震災以後、日本語で一番、悪役になった言葉ではないでしょうかね、「頑張る」という言葉が。

「もう少しの辛抱」とか、「早く元気になって下さい」、「貴方は、まだいい方ですよ」とか、「もっと辛い人がいます」、これもいけないですね。比較しては、いけないわけですね。悲しみ比べをしてはいけない。

決して、「〇〇さんは〇〇を始めてから元気になりました」、「お気持ちは良く分かります、時間がたてばよくなります」と。「あなたは強いですね」とか、そんなこと「大きなお世話」であって、言ってはいけないです。

「元気そうで安心しました」。これは何か、うっかり言いそうな感じはするんですけど、やはり言われた方は、あまりいい気分はしないそうですね。

「まだ若いんですから、忘れるのが一番です」とか、そんなこと、絶対、言ってはいけませんね。

「もう1年たったんだから、元気を出してください」なんていうのも、誰が1年たったら元気にならなきゃいけないという決まりをつくったのかということ。

本当に、こんなこともいけない。「納骨や遺品の整理をせかす」というね。

「私まで辛くなるから泣くな」と言うとか、こんなこと、本当にひどい話です。これはもう自己中心のエゴイズムでしかありませんね。

「神様が決めたことです」とか、「成仏しました」とか、宗教家でもない人までも、こういうのを言うのは、おかしい。

「法事はこうしなければいけません」とかも禁句だそうです。

では、どのような言葉を掛ければいいのかといいますと、死別を経験した人に声を掛けるなら、事前に会話の糸口をやっぱり用意する。故人の思い出の話とか、故人のいい話が、

やはり、いいですね。人柄とか長所とか。

そして、「貴方のことが気にかかっていましたが、いかがですか」と言うてみる」。これが非常に練り上げられた言葉だということになります。そして、「お辛いでしょね」と押し付けずに聞くと。

「〇〇さんの事をお話になりたいですか」、故人のことを「聞かせてもらってもいいですか」と聞く。故人の話は事前に聞き出すということですね。

そして、つじつまの合わない話、前回と違った話をするのは、別に構わないのだと、聞き流していく。

「ぼんやりして注意力が散漫になっていることがあるため、思わぬ事故にあわないように声をかける」と。

「控えめに自分も同じ経験をしたことを話す」と。それで、「自分の適応の方法を押し付けない」ことですね。

このような話をいつも1時間半ぐらいかけてやるのですが、ちょっと今日は急ぎ足でやりましたので、端折ったところとか、言葉が不足して誤解を招くようなところもあるかもしれませんが、後で、また聞いていただければお答えさせていただきたいと思います。

医療従事者や宗教関係者と共に、儀式という大事なところを扱っていく私たちもまた、本当に悲しみを少しでも軽くしていく、サポートしていくお手伝いをさせていただきたくて、こういう運動を、いま全国に広げていこうと思っております。

私の話は以上でございます。ご静聴、どうもありがとうございました。

○鎌田 どうもありがとうございました。

次に、コメンテーターのお二方に10分ぐらいずつ話をさせていただきます。

まず最初に、鈴木岩弓さん、お願いします。

コメント1

東北大学教授・宗教民俗学

鈴木 岩弓 氏

東北大学の鈴木と申します。

今朝、仙台空港から飛行機に乗ってきました。去年、飛行機が飛び始めたころは、まだ飛行場の中ではヘドロの臭いがしておりました。仙台空港は、皆さんの多くがご覧になったかと思いますが、NHKのライブの放送の中で津波が押し寄せるシーンが録られた空港ですね。私がああシーンを見たのは三日後か四日後の電気が通じてからでしたけれども。

もう、いまはヘドロの臭いもなくなっています。ただ、空港の周りは、がれきの山が、

まだ多少残っていて、津波が来たということが、よく分かるような状態になっています。

今日、お招きいただきまして、いろいろ先生方のお話を伺いましたけれども、私は仙台、一応被災地に住んでおりますけど、被災地に住んでいる人間と比べて、逆に外にいらっしゃる黒崎さんや鎌田さんなど、いろいろなところから被災地を大変広くご覧になっているので非常に頭が下がる思いです。

といいますのは、私の方は自分の近くに問題が多いので、そんなに広い範囲を見て歩く余裕がないんですね。私は福島県の特に相馬市や南相馬市は、ずっと昔からフィールドにしていたところで、今回すっかり壊滅してしまった地域もありますが、フィールドワークをしたために知っているところはあります。そういうところが宮城県でいうと南三陸町や石巻市、岩沼市の方になり、このところ岩手の方には足を伸ばす機会が無くなっております。。

ですから、私の方は限られたところのデータでもって、ちょっと簡単なコメントをつけさせていただくことになります。

まず黒崎さんの方のことに簡単にコメントをつけると、黒崎さんのお話は神社の話ですけれども、ある意味では、宗教施設というものが持っている、一つの地域における役割ということになるんだと思うんです。

これも皆さん、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、閑上という地域、名取市にある港町でしたが、もうすっかり壊滅した地域です。海辺のすぐそばに日和山という小さい山があるんですが、そのてっぺんに、小さな祠がありました。

その山のてっぺんまで津波が来たので、祠は全部なくなってしまったわけですが、そこが、ある意味では慰霊の施設となっています。神道的なかたちで、神社の再興もなされていますし、仏教式の大きな塔婆も建てられました。

閑上というところを一望に臨める小さな山なんですよ。しかも、それが津波で全部やられるぐらいの高さの山なんですね。そこに塔婆がいっぱい建てられて、ある意味では慰霊の場所になっています。本来小高い場所にある宗教施設だったということもあって、ここが被災地を見渡す慰霊の場になっています。従来までの宗教施設の空間が、慰霊施設という被災者の人々をまとめ上げる空間となっている一つの事例と言えらると思います。

そのほか、今日お話になりましたようなかたちでいうと、神社の民俗芸能だとか、あるいは地域コミュニティーの、いわゆるコミセン、コミュニティーセンターになっているというような宗教施設は、被災地のいろいろなところにあるかと思えます。

それで、私は簡単に一つだけコメントをつけたいと思うんですけど、宗教施設、お寺にしろ神社にしろ、いろいろな活動をされてきたということを言われる中で、さきほどもちらっと言われたことですが、宗教者のご家族の方のご活躍というのかな、これもやっぱり、かなり重要なことではないかと思うんですね。玄侑宗久さんも、奥さまが、たぶん、いろいろなところで活躍されているのではないかと思います。

先ほど黒崎さんがご説明された被災地における神社については、川村一代さんがまとめ

られている『光りに向かって 3・11 で感じた神道のこころ』（晶文社、2012年）には具体的なお話しがいっぱい出てきます。川村さんからはこのご著書をお送りいただいたのですが、本日もこの場にいらしていただいています。この本の中に出てくる南三陸町の上山八幡神社は以前から存じ上げていた工藤祐允宮司さんの神社で、先日伺った際に、娘さんの工藤真弓さんが『つなみのえほん—ぼくのふるさと』（市井社、2012年）という本を出版されていることを知りました。真弓さんは工藤宮司の実の娘で、旦那さんの庄悦さんとの間に由祐君という五歳の息子さんがいます。この本は初め紙芝居として真弓さんが作ったものですが、それがまとめられて本になったものです。この本では地震の起こった当日を中心に真弓さんの身の回りに起こったことが簡潔な文体で記されており、津波の怖さを伝えると共に、津波から復興していこうという、被災された立場からの意志表明みたいなものが出てきます。

お会いした当日は、真弓さんご自身による紙芝居も拝見したのですが、そこに描かれた絵が収録されている本も大変素晴らしい出来だと思えます。一言だけ言いますと、本文中には息子の由祐君との会話が、いろいろ書いてあるんですけど、以下のような記述があります。

こうしてしん災から九ヶ月が経ったある日、ゆうすけが、ふっとつぶやきました。「おかあさん、ゆうすけには、こわれた、ふるさどがあるんだよ。—しづがわ」

「え、ゆうすけには、ふるさどがあるの？」……そうか、そうだよね。

こうして由祐君という子どもさんの一言は、お母さんの真弓さんの気持ちを救ってくれることにもなりお母さん自身このことを紙芝居にして伝えることで、被災地に住む人々に対して大きな力を送っています。

こうした活動は仏教寺院の方でも確認されます。これも編者の小野崎美紀さんからいただいたものですが、『あったかい手 宮城県石巻市海の近くの避難所五ヶ月間のことば』（ぱんたか、2011年）という本です。小野崎さんの夫の小野崎秀通老師は、石巻市にある洞源院という曹洞寺院で、震災直後から五ヶ月間にわたし 400 人もの人々の避難所となっていたところで、そこで起こったいろいろな出来事やメッセージが収録されています。

つまり、そうしたかたちで、神社やお寺も宗教者のみならず、そのご家族もいろいろと献身的な活動をされて、今回の震災に際して世に発信されているということも、ぜひ注目すべきことではないかなと思っております。

次に、一条さまのお話に関連して言いますと、実はこれ、ちょうど先ほど島菌先生のお話の中にもあったことですが、私たち東北大学で「実践宗教学寄附講座」というものをつくっています。

それは、やっぱり実際に現地で、支援で入って「カフェ・デ・モンク」ということで、カフェで文句を言ってもらおうというかたちで、傾聴で行くのですが、そのときに、どう人と対峙したらいいか、どういう会話をしたらいいか。この辺が非常に難しいことが、はっきりしてきまして、それをやっているのが実は宗教、宗派を超えた超宗教超宗派でやっ

ている。

ですから、われわれの仲間はお坊さんもいますけど、神主さんもいますし、牧師さんもいるというような、超宗派で現地に入ってお茶を出したり、コーヒーを出したりというようなことをやって、それをきっかけにお話を伺い、ある意味では、グリーンケアをやっていこうということをやっております。

先ほどの一条さまのお話で出てくる中には医療従事者、心理関係、そして宗教者とありますけれども、とりわけ私たちは、宗教者が自分の布教のためではなく、宗教宗派を超えたかたちでの宗教的ケアが、いかにできるのだろうかということを、「臨床宗教師」という名前であらうと考えています。

非常に、ちょっと難しいことところを狙っているのですけれども、いわゆる、アメリカの軍隊チャプレンなんかは、そういうことで実際にケアしてきているという現実があるようですので、こういうことが日本で確定できれば、一つの新たな宗教改革というか、宗教者の新たな出番が確定してくるのではないかと考えています。私は宗教者ではないのですけれども、そう思って活動をされている方たちのために、どのような方向付けをするかといった検討を行うための講座を開いています。

ただ、そういう中で、去年の秋ぐらいから、やっぱりお化けが見えるとか、何か、そういう不可思議な話は、被災地でしばしば聞かれているのですが、そのケアで、いろいろ大変なことがあります。中には霊が取り付いたとか、そういうような話も出てきています。

従来、そうしたことは、ミコさんと言われる、青森まで行けばイタコさんと言いますけど、宮城県だったらオガミヤサンとかオガミン、ミコさんなど、いろいろな言い方をしますが、地域にはそういう人たちが宗教文化として担っていた部分があるわけです。結局、そうした部分も、ある意味で臨床宗教師の方で担えるようなかたちになればいいかなと思っています。

最後に、奇跡みたいな希望の見えるような写真をお示しいたします。これ、実は、最初に申し上げた、仙台空港のすぐそばで、これは下増田神社といえます。

この周りは津波で全部やられているんですけど、ここは、いわゆる微高地というやつです。飛行場が、すぐこの裏なんです。反対側が海です。海と飛行場の間にあるのですが、間にありながら、標高2メートルぐらいの、この神社が津波の影響を全く何も受けなかったんですね。飛行場に逃げた方がおっしゃっていましたが、「波が、ここをよけてきていた」と言うのです。ある意味では、一つの奇跡みたいな感じで。

神社の裏には石塔が建っているのですが、これは昔のまま全然、動いていないということです。そういうことで、ここは結構ありがたい神社だと言われていました。

それに対してこの神社の横に墓地が見えたかと思うんですが、実はこの墓地のお墓は、津波の直撃を受けカロートが洗い出されてしまっています。所によってはこういうふうに骨も出ています。こうしたところは祖先祭祀の問題からすると、すごく重要なことです。家が流された人たちは仏壇が流されているので、位牌、遺影、過去帳が流されています。

その上、お墓もこうやって、ひっくり返って骨も流されている。そうすると先祖の依り代がなくなっているということですね。これがどうなるのかということも、また一つ、重要な問題になるかと思います。

もう時間が来ましたので、これでコメントは終わらせていただきます。ありがとうございました。

○鎌田 どうもありがとうございました。

では早速、続きまして、井上ウィマラさん、お願いします。

コメント 2

高野山大学准教授・スピリチュアルケア学

井上 ウィマラ 氏

高野山大学の井上です。私は専門が仏教瞑想に基づいたスピリチュアルケアということで、主にグリーフケアの話題についてコメントできたらと思っています。

先ほどの鈴木先生のお話で、「壊れたふるさとがある」という子どもの言葉に、思わず涙がこみ上げてきました。やはり悲しみにも表れ方が幾つかあって、大切なものをなくした当時の「急性悲嘆」と言われる身体症状をも伴う状態から、半年なり1年がたつて、その人なりに意味が受け止められて、悲しみがなくなるわけではないのですけども、泣き笑いしながら思い出せるような状態になっていきます。英語圏では *sour sweet* と言うそうですけども、いい思い出も、辛い思い出も、それぞれ泣いたり笑ったりしながら思い出せることができるようになっていくようです。悲しみを「乗り越える」という表現はよくないのかもしれませんが、悲しみを抱えて生きていけるようになることが一つのメルクマールだとして、専門家の方はそれを「統合された悲嘆」と呼んでいます。

急性期のまだ荒い悲嘆で、身体症状もいろいろ出てくる状態から、その人、あるいはそのものを失ったことで自分は何を失ったのかということ、フロイトは「内的な喪失」と言っていると思うんですけども、喪失の意味を自分なりに了解することができるようになると、泣き笑いしながら、その悲しみが受け入れられるようになり、思い出に変わることができる。すると、なくしたものの思い出は自分の人生の中に位置付けられて、将来を見据えて生きていこうと思う力が出てくる。それが悲嘆から回復していく一つの道標だということなんです。

「こわれたふるさと」という言葉の中に、その少年、数歳児だと思うんですけども、その子の中にある、専門家であれば *resilience* と呼ぶであろう力を感じました。5歳ぐらいの男の子の中に回復能力、あるいはスピリチュアルなものが発現するのに接して、そういう

「生きる力」に導かれながら、私たち大人も、この悲しみを共に生きていくことができるようになるのでしょうか。悲しむことから育むことに、新しい命、人と人とのつながりや社会を育んでいくテーマにつながっていくのではないかと思います。

稲場先生のお話の中で、いまの私たちが、この東日本大震災にどのように立ち向かうかということが20年、30年先に、どう見られるだろうかというお話がありました。その20年、30年のスパンで考えますと、2020年問題、団塊の世代の方々が亡くなっていった迎える多死時代の問題。年間の死者は150万人になり、それに比べて、生まれてくる人たちはその半分になります。2030年問題、結婚しないで一人で暮らす中高年の方が都会にあふれてくるかもしれないそうです。

そうした2020年問題や2030年問題は、一条先生のお話では無縁社会とか、葬式は必要かという問題として語られていたと思うんですけども、将来、私たちが直面せざるを得ない問題です。150万人の方が亡くなり、生まれてくる命は75万人を切るだろうという状況下で、どう社会を担っていくかという問題に向けて、私たちはこれからどうかじ取りをしていったらいいのでしょうか。そこを見据えて、いまの時期を過ごしていかねばならないのではないかと、お話を伺って感じました。

一条先生のお話の中で、最後のスライドでしたか、こう声を掛けたらいいよということで、「貴方のことが気にかかっていたんですが、いかがですか」というのがありました。この「気にかける」という言葉を英語ではcareと言うのだと思います。Careという言葉には、気に掛ける、好きになる、だから、お世話をするという意味合いがあります。

そのお世話をする単位が、昔は家族だったり、地域であったりしました。それが、産業革命以来、人間関係や絆のかたちが変わってきて、家族の力が薄れてきました。特に介護に関しては、家族では力が足りなくなったので、ケアのアウトソーシングがあたりまえになってきています。学校化や病院化もこうした流れの中での現象です。

こうした現象を、今回の災害を契機として、私たちはあらためて見直してゆくべき地点に立っているのではないかと思います。大切な人を看取り、喪失の悲しみを自分なりに受け止めて、その悲しみを次の世代を育む力、絆を結んでいく力に変えていけるようにするにはどうしたらよいか。そうした視点から生き方を問うこと、つながり方を問うことです。それは科学、技術、経済、政治、全てを含めてだと思うんですけども、そういうことが問われているんだと思います。

私は発災直後、複雑性悲嘆の研究者の方と高野山大学でお話しする機会があつて、それが契機となりまして、Japan Disaster Grief Support Project (JDGS) の立ち上げに加わりました。インターネットで検索していただくと、すぐ出てきます。これを見ていただくと、一条さんのグリーフケアに関するお話の理論的な背景が具体的に分かっていたけるのではないかと思います。

それから、もう一つ、今日ご紹介したい本をここに持ってきました。『サイコロジカル・ファーストエイド』です。日本語に訳すと「心の応急処置」という本が、昨年7月ぐら

いに出版されました。これはアメリカで作成された本ですが、兵庫県のこころのケアセンターが翻訳して、ホームページに掲載していたものが、発災を契機に、大切なものだとということで書籍化されたものです。

こういう大変な災害が起こったときに、そこに入る専門家の方、あるいはボランティアの方も含めて、何に気を付けたらいいのか、先ほどの一条先生のお話にもありました、掛けてはいけない言葉も含めて、事細かに書かれています。

この本の第2章だったと思いますけれども、悲嘆のケアに関しては宗教者の担う役割が大きいので、その地域にはどんな宗教者がいるのか、その被災者さんはどんな宗教者と会いたがっているのか、どのように葬儀をし、話を聞いてもらうことを求めているのかに関して十分な情報を集めてください。そして、その宗教者に引き継ぐお手伝いをするようにしてくださいということが書かれています。

その一方で、その項目の最後のところには、「しかし、布教しているところを見かけたら、係の人に通報してください」ということも書かれています。

つまり、そこには高野山大学で行おうとしたスピリチュアルケアの重要性、あるいは鈴木先生のところで養成しようとしている臨床宗教士やチャプレンの重要性が記されているのです。

実は、この『サイコロジカル・ファーストエイド』の作成者の中には何人かのチャプレンが入っています。医療者とチャプレンが災害現場で共に仕事をするという背景から、この本ができたわけですね。

ですから、この本を導入することで、私たちは宗教者として、災害などの現場で医療者をはじめとする他の専門職の方々と共に仕事をしていくために、何を常識として備えていかなければいけないのかということが見えてきます。関心のある方は読まれてください。

それから、JDGSプロジェクトの一つとして、私はパークス先生の災害ケアに関する論文を翻訳しました。パークス先生は、世界で最初の聖クリストファー・ホスピスで遺族会を立ち上げた人です。その遺族会では、ボランティアを教育してグリーフケアに取り組む仕組みが作られました。

彼はその後、災害ケアに取り組み、さまざまな災害現場でケアのリーダーシップを取りながら、グリーフケアと災害ケアが、どのように通じるかということ、この論文の中で示してくれています。たとえば、遺族ケアに関わった人は、災害現場に行って、すぐにそれと分かるのだそうです。粘り腰が利くからです。大切な人を亡くした悲しみがどういふものか、それを支えることがどんなに大変なことかを身をもって知っているからだということですね。

もう一つ興味深い話は、ニューヨークの9.11同時多発テロのときのことで、パークス先生はイギリスから現地に飛んで、グリーフケアのボランティアを指揮します。もう一つ、警察には犯罪被害者の遺族支援というものがありますが、そのスペシャルチームも派遣されます。この二つのチームが、ニューヨークテロのときに、初めて出会います。どちらもP

TS Dに関わる部分があるのですが、その二つのチームが出会って、お互いにどれだけ支え合えるかを初めて学んだということです。それ以来、これが定式化しているようです。

ですから日本でも、病院をはじめ、さまざまところで遺族会なり、グリーフケアの自助グループなどが定着して行ってほしいと思います。そして、それが今回のような災害における復興支援のケアへとつながっていく必要があります。

災害時に被災地に行くと分かりますのは、保健師さんのルートで入ってくる情報と警察のルートで入ってくる情報が、つき合わせてみると同じ家族についての情報であるのにも関わらず、最初は、よく分からないことが少なくないということです。その二つの情報、保健師ルートと警察ルートの情報が合わさって、ああ、同じ家族さん、遺族さん、被害者さんのことを話していたんだということが分かると、支援体制が格段に組みやすくなります。現場でさまざまな分野の専門職の人が一緒に仕事をしてゆくメリットが発揮しやすくなるということです。

最後に、「複雑性悲嘆」という話が出ましたので、少しだけ補足しておきたいと思います。日本では神戸の震災のときに、ボランティアとPTSDの問題が取り扱われるようになりました。その後のJR西日本の福知山線事故で、グリーフケアの大切さが取り上げられて、グリーフケア研究所がJR西日本の基金によってつくられました。

そして、今回の東日本大震災の中で複雑性悲嘆の問題がクローズアップされ、グリーフのエキスパートと伝統的な宗教とが一緒に取り組んでいかなければ間に合わないということが言われようようになってくるのではないかと思います。

複雑性悲嘆は、うつ病とPTSDと、三つ巴になって現れてくるものであることを理解しておく必要があります。そして、PTSDの治療がうまくいって始めてグリーフに取り組むことが可能になっていきます。トラウマを抱えたままでは、うまく悲しめないのです。そうしたことを理解しておいて、私たち宗教者は、先ほどのお化けが出てくるとか、霊が見えるという状況に向かい合っていくべきなのではないかと思うのです。沖縄では「ユタ半分、医者半分」という言葉ありますけれども、その人のその時の状況に合わせてアプローチすることが重要なのです。

災害後の緊急時には、宗教的な儀礼によって悲しみを癒す効果は大きく、それが大きなセーフティネットになります。そこからこぼれてくる心の傷を抱えた人には、専門的な医療が必要となり、PTSDが癒されて、それからあらためて悲しめるようになるのです。そうした流れの中で、総合的に支援するチームをつくっていくことが大切だと思います。

最後にもう一つ。石井さんというジャーナリストが『遺体』という本を出されました。その本の中で、釜石の話でしたけれども、葬儀産業に関わっておられた退職者の方が、遺体とご遺族の対面に関して非常に丁寧な対応をして助かったという話が出てきます。

死後硬直はこう直していけばいいとか、損傷のひどい遺体の場合はこう声を掛けていくとか、遺族さんが尻込みしているところをどう支えたらよいかということ、細かくケアしてくださったので助かったということです。私はこれを読んで、本来は、やはり宗教者

が、遺体と遺族の対面に際して、もう少し活躍する場所があってもいいのではないかと思います。そこにこそ宗教の原風景があるような気がしたのです。

仏教の中に「不浄観」という修行法があります。これは死体を観察しながら自分の性欲を乗り越えていくというものです。私も実際に、やったことがありますけど、とてもストレスの高いものです。最初、死体に囲まれたその場にいられません。吐きます。だけど、だんだん慣れていく。そうした状況に耐えながら、死別された方の悲しみに寄り添っていくということも含めて、宗教者のトレーニングの中に入れていくことが必要ではないでしょうか。

葬儀産業の方、エンバーミングの方、医療関係者の方の応援を得ながら、伝統的な修行法を復活させて、宗教者としての自分をトレーニングして、今回のような大災害の悲しみに寄り添いケアをしていく準備が整うのではないかと思います。

ありがとうございました。

○鎌田 どうもありがとうございました。

これまで4つの報告、そして3人からコメントをもらいました。それらの話を伺いながら思ったことが二つあります。

一つは、いま問題になっていることのポイントは、宗教を超えた宗教的なもの、超宗教、あるいは超宗派、そういう公共宗教と言うのか、宗教の公共性とか、利他性とか、社会性とか、他者性といったようなところへつながっていく宗教の力や役割はいったい何なのか、が改めて問われているということだと思いました。

そういう宗教の公共性を編み出し、活力を増していくためには、もっと深い内的な自分たちの宗教体験なり、宗教的ミッションの自覚なり、それぞれ固有の宗教的な力がやっぱり必要で、それぞれの宗派や宗教の伝統と精神性・霊性に基つきながら、それを超えていくということが大きな課題として出てきているということをそれぞれの発表者やコメントーターの中から感じ取りました。

もう一つのポイントは、通人間性というのか、人間に共通な問題だということ。例えば、日本人であるとか、中国人、韓国人であるとか、ヨーロッパ人であるとか、そういうことでなくて、災害とか、事件とか、いろいろなことが起こったときに、特にグリーフケアが大切になってくるということ。それは、なに人であろうと変わらないだけでなく、大人も子どもも同じであるということ。悲しみや痛みというものを抱えて生きていかざるを得ないということです。

そういう通人間的な問題に対して、私たちの社会の文化遺産と言うのか、文化力というもの、どう活用していくことができるのか。そのとき宗教はいったいどのような役に立つのか。宗教が持っているリソースやワザというものは、いったい何であるのか。そういう問い掛けがあったかと思います。

ここで、10分休憩します。ちょうど3時半に、第3部のディスカッション、総合討論を始めます。その冒頭で伊藤博夫会長さんに雄勝法印神楽のこの1年4カ月を振り返りながらご挨拶をしていただきます。それでは、休憩します。

(休憩)

ディスカッション

○鎌田 それでは、第3部、全体の締めくくりのディスカッションの時間に入りたいと思います。発表者の先生方にはご登壇いただきます。

いま、私の後ろに出したスライドが、先ほど午前中、冒頭部で申し上げました雄勝法印神楽を伝承して、子どもたちが共に学んでいる雄勝中学校と大須中学校です。両中学校は数年後に合併するとのことですが、いま合同で修学旅行をしていて、昨日から京都に来ています。そして、先ほども申し上げたように、今日の朝、午前中に、京都市立開晴小・中学校の小学1年生から中学3年に当たる9年生まで、全校児童・生徒が一緒になって、雄勝町の雄勝中学校と大須中学校との交流に全員参加したわけです。

そこで、これから話をさせていただき伊藤博夫会長さんが笛を吹かれて、そしてここに行のお二人の方々も囃子方でサポートされ、大津中学の3人と先生一人の4人で舞を舞いました。

それでは、伊藤博夫会長さんにご挨拶をお願いします。

○伊藤 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、雄勝法印神楽保存会の伊藤と申します。

このたびの、昨年の大震災後には、全国の皆さまからのご支援で、私たち保存会の、ほとんど流されました衣装装束、お面、その他の道具類の復活できました。震災後、本当に数週間、どうしようという間、会長も行方不明のようだ、道具類も流された、さあどうしようと思いました。

前の年に、私たちは、国立劇場に公演で来たのですけれども、それを見に来てくれた豊島区の方々から2011年の1月に電話を頂きまして、豊島公会堂でぜひ神楽を上演してくれないかという話がありまして、日程も大丈夫なのでぜひ行かせてくださいと即オーケーしたのですね。それが、道具類も全部流された、さあ、どうしようと、何も考えられず、どうしようと困っていたところに、いろいろな方々からのご支援が起こってきたのです。

国立劇場に見に来てくれた地元出身者が関東圏にだいたいいるんですけれども、その人たちもふるさとに帰るのはお正月とお盆です。春と秋のお祭りにはほとんど帰らないのです。ですから地元の神楽でも、国立劇場で40数年ぶりに見て感激したという話を寄せてくださ

ったんですね。

それが津波でどんと流されたという報道を知って、鎌倉にいる青木さんという雄勝出身の方が、10月に薪能がある、その後の土曜日にあるから、その次の日の日曜日、仮設のその舞台を使って神楽ができないかというお話を頂きました。

さあ、道具もないし、どうしようかということで、でも、こうしてられないというような気持ちから、何とかして周辺の神楽団体から足りない道具を借りながらでも、ぜひ行きたいということで、そこから復興に向けて保存会が集まりまして始まったのです。

全国の皆さんから本当にいろいろご支援いただきました。それから、ユネスコさんにも入っていただきまして、支援企業もご紹介いただきました。

お面の修復は実物がなく、写真しかないのですが、それを奈良の国立博物館の国宝修理所の皆さんがつくってみたいということで、これも、わざわざ地元まで来ていただいて、写真を見ながら、私たちの意見を取り入れて、目の前で復元していただきました。いま途中ですけれども、今年中にはお面類も全部そろそろと思います。衣装とか、そういうものは業者さんに頼めばできますので、その辺は全部そろいました。

今日は中学校の修学旅行の学校間の交流があるのでどうしようということだったので、私たち3人、笛と太鼓二人がいないとできないということでしたので、では、ぜひ一緒ということになり、たまたまそこに鎌田先生に来ていただきました。本当にお忙しいところをありがとうございました。

いま復興の途中ですけれども、今年中には何とか全部そろそろようになります。本当に皆さま方に変なご支援をいただいて、ありがとうございました。

○鎌田 伊藤博夫会長さん、どうもありがとうございました。

そういう不思議な巡り合わせで、黒崎さんの発表にも、私の話のなかにもありましたが、雄勝法印神楽は、東北、宮城県を代表する民俗芸能であり、伝統文化です。それを大切な絆としながら地域が結ばれ、復興に向かっていく姿を見せていただきました。

では、発表者とコメントターの先生方、ご登壇ください。それぞれ時間不足で話し足りなかったことが多々あるかと思います。でも、最後に2回ずつお話を全員に伺うことは不可能だと思いますので、3～4分か、長くて5分以内で、ご自身のお話の補足やそれぞれの発表者に対してのコメントなど、お話しください。

では、玄侑さんから、お願いします。

○玄侑 さっき、あまりいいことを話さなかったものですから、よかったことと、ひどいことを一つずつお話しします。あ、ひどいことを先にしますか。印象が変わりますのでね。

ひどいというか、わが県の双葉町長の発言、1月8日にあった発言によって、人権という意識が目覚めてしまいました。要するに、「双葉郡民も国民ですか。法の下に平等ですか。守られていますか」という、あの発言ですね。あれが出たことで、ものすごく中間貯

蔵施設というものができにくくなってしまいました。

おそらく、私はできないのではないかという気がしています。どこの町でも、うちの町にはつくりたくないという権利があるわけですね。いま、そういう状態です。民主党政権がこれを変えられる根回し力を持っているとは思えない。

ですから、あれが決まらなないと、たとえば南相馬など、まだ1カ所も仮置き場が決まっています。ですから、根本的な除染はできないということなのですね。その上で、嫌なやつとどう付き合えばいいのかというような問題として、放射能との付き合い方を考えていきたいなと思っています。

そして、もう一つはいい方の話です。とにかく、私の所は地震の被害は多少ありましたが、津波は来ませんし、放射能もさほど濃いわけじゃないので、何ていうか、ちょうどいいハブみたいな場所になったのです。私の所に送れば、たぶん避難所や仮設住宅に持って行ってくれるんじゃないかと思われる方が多くて、とにかくいろんな物がうちに送られてくるのですよ。今後は、ぜひおやめいただきたいのですけれども。

でも、その送られてくる物を拝見して、それを必要な場所に運んでいくのですけれど、本当に、自分で一生懸命やった写経ですとか、着てほしいという浴衣ですとか、とにかくいろんな物がうちに集まってきて、ものすごく大勢の人々の祈りと善意を感じました。

自分は無力で、そっちにも行けないし、何もできないけれど、祈りたいと言っているいろいろな送ってくるのです。これが本当に被災者たちの底力を呼び覚ましていているという感じがしています。

天明の飢饉のときの被害の各藩ごとの違いなどを見ますと、やはり政治の力が天災の被害を縮小するというのは明らかにあると思いますし、もう少し政治に頑張ってもらいたいと思いますけれども、それぞれの無欲な個人たちの祈りは、とても無数にあったし、だから、あそこにいられるという感じもあります。

ありがとうございました。

○鎌田 ありがとうございました。では、島菌さん、お願いします。

○島菌 はい。玄侑さんが、ひどいことがあるということをおっしゃって、私は、それは大事だなと思っています。災害支援ですので、善意から出て来るいいことをお互いに伸ばしていこうという今日の集まりだと思いますが、やはり、厳しい、難しい、一致できない、対立することがたくさんありますね。風評被害は、その一つであり。

まあ、風評被害と言ってもいいし、差別ですね。それはとても深刻な問題だと思います。福島へ私も数回行くたびに、いかにそういうことで福島の方が痛んでいるかということを感じますね。ただ、災害支援の、そういう共感する気持ちと、差別を越えていこうという気持ちは、当然一致できるはずのものだと思っています。

ですので、問題は、やはり原発を巡る問題ですね。沖縄にオスプレイが配備されるのを

みんな嫌だと言っていますね。そういうこと。それから、原発の再稼働は嫌だと言っています。それと、放射性物質が出てきたものをどこに置くかという問題は少し性格が違うと思うのですね。

つまり、みんな嫌なものは近くに来てほしくないというのはあるのですが、アメリカ軍が、よく分からないのにオスプレイをここに置くとか、長年、沖縄だけに防衛の負担を強いているところに対して、いま沖縄県民なりは反対しているわけですね。

それから原発の問題も、原発によってわれわれはいろんな恩恵を被ってきたことはあるけれども、あまりにもいろんなことが隠されてきて、うそによって行われてきた。本当は悪いことがたくさんあるにもかかわらず、あたかもよいことであるかのように思わされてきた。われわれもそれに加担してきたのですけれども、そういうシステムそのものに対する、異議申し立てというものがあると思います。ですから、いま起こっていることは、あじさい革命だというふうなことを言われているわけで。

軍事的なものが背景にある大きな政治的な力によって強制されてきたようなものですよ。それを市民の、よい関係をつくっていこうという意志によって越えていきたいという側面と、地域エゴみたいなことが重なって見えるということがあると思うのですね。そこは何とか克服していかなければいけないと思います。

放射能のことで言うと、ここは少し玄侑さんと実は潜在的に対立しながら、にこにこお話をしているのですけれども。私はやはり、安全情報、例えば、今日の朝日新聞にも甲状腺についての情報が出ていたのですけれども。要するに、原発倒壊以後、放射能の健康影響については過小評価をして隠すのがアメリカの方針であり、核保有国の方針で、それに対して住民が闘ってきたという長い歴史があります。

そういうことが事故以後の放射線の情報提供にも関わっているのです、これは国会事故調の報告書でも政府、東電を厳しく批判していますけれども、さらに、これは専門家、科学者の方にも関わってくるのですね。

そのところは、私どもは科学者、専門家の仲間ですので、間違ったところは大いに批判し合い、変えていかなければならない。そういうところでは、対立をむしろ、ここでこそ起こして、それを越えていく方向に向かっていかなければならないと思います。

差別については、そういうふうに放射能の問題に強く意識することが差別を増やしてしまう側面があります。しかし、それは、放射能の影響に対して敏感である人の本来望むところではないはずですね。そのところを何とか、うまくコミュニケーションしながら克服していく方向で努力していく必要があると思います。

また、保養プログラムでは、要するにさっきから出ている話なのですが、地元の方と福島の被災地域の方に、「行って」が大事だという話がありましたね。それから、「気に掛けて」が大事だと、一条さんとか井上さんも言っていました。要するに、距離が開いちゃうと、その間に不信が生じ、いろいろ猜疑心も出てきてしまうというようなことがあります。

それで、お互いの利害の対立のようなことが非常に悪い方向へ強く意識されてしまうのですね。ですから、とにかく交流しながら、お互いに支えていく気持ちを出し合っていくことで何とか差別を越えていくことができるはずだと思っております。

以上です。

○鎌田 では、次に、稲場さん、お願いします。

○稲場

今回こういった大災害が起きて、被災地での宗教者の取り組みというものを、いろいろと聞き取りをさせていただくなかに、本当に大きな力を、神社、お寺、教会、宗教施設が持っているなと思いました。これはほかのところでも書いていますけれど、まず場の力があつたということですね。

同じ被災されている場所で、指定避難所になっている公民館、小学校がある。でも、そのちょっと離れた所にお寺、神社があると、みんなそこに逃げているのですね。やはり、広い空間があり、畳があり、安心できる場がある。そこに逃げている。場の力があつた。それからまた、資源力もあつたのですね。食べ物とか備蓄されているのですね。そういったものによって、自衛隊とか行政の支援が来るまでに数日間生き延びることができた。また、檀家さん、氏子さん、多くの方々の人的な力もあつた。

そして、そういった、お寺、神社、教会、宗教施設にいるということで、1カ月、2カ月避難生活が続くなかにも祈りというものを持たたと。住職の方々、神父さん、牧師さん、神主さん、宗教者の方が、祈りなさいとか、ここにいるから一緒に祈りましょうと声を掛けずとも、しばらくそこにいることによって、自然と何か「祈りたい」という方々がいた。

こういう場の力、資源力、そして、人的力、祈りの力というものが宗教の場にはあつたと。これが今回、本当に大きく、明らかになった。でも、これが社会的にあまり認知されていないということですね。今後、東海・南海・東南海連動型地震が来る。宗教が、国と地方自治体と、またNPO、NGOとどう連携していくか、本当に大きな課題だと思えます。これが1点です。

もう一つ。先ほどグリーンケア、ケアの問題があがっていました。これもいろんな方々の声を聞くなかに、やはり心だけを切り取った心のケアはあり得ないと。先ほどいろんなお話を頂きました。マニュアルもある。でも、そのマニュアルを越えて現場で関わられている方、また専門家の方は、さまざまな一人一人に合った、寄り添ったかたちでのグリーンケア、心のケアをされている。つまり、マニュアルを基に心だけを切り取ったケアではなく、一人一人が違う状況にある、それに対応したケアの在り方があるのではないかと感じました。

最後に1点、原発の問題に関してです。私も、ある電力会社、そして原発をつくっている。そして、海外にそれをずっと売ってきた人が友人にいます。本人の思いとは違って、

やはり組織として何をすべきか、また、上司から言われてしなければいけないこと。自分の生き方、思いとの葛藤のなかで生きている人もいますね。

そういったことを思うなかで、私も原発問題に対して、また、社会の在り方に対して、自分なりの思いを持ってきました。そして、今回の原発事故に対して、ある時にふっと思ったことがあります。

津波が来たらこうなるのではないかと、数年前から分かっていたのに安全対策を怠ったと、いろいろ報道されていますが、それは、安全をないがしろにして経済、効率、利益重視で走ってきたものがあつたと。でも、それは私自身の心でもあるのだということに気付きました。

そういったなかで、これは、ある人たちだけを責めても解決するものではなく、日本だけでなく、いまを生きる現代人一人一人がエネルギー問題、そして、さまざまな環境問題一つ一つを、誰かを責めるのではなく、自分の生き方はどうなのだと、それを問うなかで意識が変わり、また、行動が変わり、ライフスタイルが変わっていく。

そして、将来の子どもたち、あるいは、これから生まれてくる命、その人たちに対してどういう社会を伝えていくか、そういったことを考えていく必要があるのではないかと、考えています。

○黒崎 若干言い忘れていたことがありますので、それを補足させていただきます。地理学者の山口弥一郎という人が、明治 29 年の明治三陸大津波、それから、昭和 8 年の昭和三陸大津波の際の集落移転について調査して報告などにまとめています。

今回、東日本大震災においても、これから先、津波被災地の集落、それまで形成されてきた集落、コミュニティがどういうふうになっていくかということは非常に心配されていますし、また実際、行政のさまざまな防災計画ですとか、コミュニティごとの自主的な動きなどによって、集団移転するか、あるいは、分散して移転するか、さまざまな選択肢がある。

しかし、山口弥一郎さんが書いているのは、結局のところ実際には、選択肢があるといっても、いろんな事情によって高台といってもなかなか難しい。また、低地の方がいろいろ便利がいいということで、またそこに戻ってくる。そして、また、もう一回津波がやって来る。それで被災することが繰り返されていることを、山口弥一郎さんは非常に嘆いているわけですけども。

そういったことが今後また繰り返されないとはいえないような気がしています。それに加えて、原発事故による警戒区域になっている所というのはあるわけです。

山口弥一郎さんは、低地に戻ってくる一つの要素として、屋敷神とか墓地が、かつての居住地にあったことで、そちらにまた拌みにいくことが、繰り返す、戻って来る一つの要因としてあつたことを指摘されています。

これは私の考えではなくて、ある私の同僚といいますか、先輩といいますか、茂木栄先

生という、宗教民俗学をやっている先生が一つのアイデアとして、そういった低地の神社、祠等、宗教的な場は、浜宮として残しつつ、高台といったところにもまた新しく、お宮、お寺等を建てる。そこをコミュニティーの結束の場、憩いの場としつつ、お祭りのときなどには帰ってくるといったことはできないかということをご提案していらっしゃいました。

実際そのような試みがすでにあるのかどうかは私もよく分からなかったのですが、この間、実は南三陸町の上山八幡宮の工藤祐允宮司さんにちょっとお話を聞いたのですが、荒島という島が南三陸町にはありまして、そこは実は所有者がいらっしゃる私有地なのですが、チリ地震大津波があった昭和 35 年に、志津川の沿岸のたくさんの祠が流されてしまったのですが、その後、実は、そのたくさんの祠の祭神といますか、ご神霊を荒島に移し、遷座して、そこに荒島神社という神社が新しく昭和 36 年に創建されたのですね。

それで、年に 1 回、7 月の荒島神社の例大祭のときには、それぞれの元あった場所に仮宮を建てて、ご神霊を戻していく。船で、船渡御というかたちで戻して行って、また帰っていくことを実は毎年、毎年繰り返していらっしゃるということがあったそうです。

これから先、津波、被災された場所に、新しいコミュニティーのかたちを模索しつつ、新しい祭り、新しい民俗芸能が、これから後出てくる可能性があるのじゃないかと思いません。そういった力をこれから私たちが見つめていく、また、心を寄せていくことが一つ、これから先重要になってくるのかなという気がしております。

あと、もう 1 点なのですが、私は今回神社に集中してお話をしましたけれども、例えば、山元町の八重垣神社のすぐ近くにはお寺があり、墓地がありました。墓地は、先ほど仙台空港近くの映像を鈴木先生がお見せになりましたけれども、ああいったかたちで墓地は墓石が転がり、中のカロートがむき出しになるという状態があったそうです。私はちょっと、その現場はすでに建て直されている状態しか見ませんでした。そういった所があったというふうに聞いています。

地域ごとにそれぞれ、さまざまな特色ある宗教文化が実は複雑に入り組んだかたちであるわけですし、それが、また横の連携をしながら地域の復興、再生を目指していくところも、これからまた見つめていかなければいけないのじゃないかとちょっと考えておりまして、その点も補足させていただきたいと思えます。

以上です。

○一条 私は福岡県の北九州市に住んでいます。その北九州市が最近、非常に全国的に話題になったことがあります。住宅地の中から、なんと、大量破壊兵器であるロケット砲がたくさん発見されたのです。新聞には、「戦争でも始める気か」と書かれていました。おそらく暴力団の関係があったようですが、非常に仰天しました。北九州市も、それでちょっとイメージが悪くなりました。

でも、実は北九州市は最近、震災がれきの受け入れをしているのです。これもまた非

常にすったもんだして、もちろん多くの反対派の人がいまして、しかし、やはり被災地の痛みを共有しようということで、最後は市長が受け入れを決断しました。

同じ福岡県では、震災がれきの受け入れを福岡市も久留米市もみんな反対していたのですけれども、九州にいったん入ってしまえばもう陸続きで、同じなのですね。だから、いま北九州市に放射能のがれきが置いてあるということは何かちょっとほっとしたというか、ああ、私も被災地、福島の方と同じような、ちょっと、もう痛みの度合いは全然違うのですけれども、少し共有体験できたと思って安心したという部分があります。

「絆（きずな）」という言葉には「傷（きず）」が含まれているように、やはり傷や痛みを共有しないと本当の「絆」は生まれません。

そんな北九州市に本社を置いています、沖縄の方でも私は冠婚葬祭事業を展開しています。沖縄の葬儀というのは非常にユニークです。皆さんも知っているかと思うのですが、ユタという存在がいて、死者と話す人ですね。そのユタを紹介してほしいというお客さまからの依頼がよくあるのです。

それで、わが社では、ユタの方をあつせんします。あつせんと言ってしまう言葉が悪いですが、紹介するのです。ですから、お坊さまとユタの方がセットで動いているところがあるのですけれども、東北でもシャーマニズムの第一人者の佐々木宏幹先生が、お坊さんと「オガミサン」という拝み屋さんがいつもセットでお葬式をやっていたと述べられています。

何が言いたいかと言いますと、先ほどから、グリーフケアの現場において言うてはいけない言葉とか、こういうことを言ったらいいよとか、あまりにも表層的な、マニュアルなことばかり私たちがやっているのかと思われる、ちょっとそこは違うのであります。

愛する人を亡くされた方の心に立ち入って、その悲しみを受け入れて話すとき、やはり霊とか魂の話をしないわけにはいかないですね。心理学を超えて、宗教的次元に入らないと、本当のグリーフケアは難しいのではないかと私は思っています。

フロイトという人が「喪の作業」ということを初めて提唱し、それによって「グリーフケア」というコンセプトが誕生したとされているみたいですが、どうも本当のグリーフケアというのは、心理学や精神分析だけでは手に負えないのではないかと。さらなる深みに入る必要があるように思うのです。

そして、「鎮魂」とか「慰霊」などのテーマを扱っていますが、私は実はいま「幽霊」が一番関心があるのです。津波で多くの犠牲者を出した場所でタクシーの運転手が幽霊を乗車させたとか、深夜に三陸の海の上を無数の人間が歩いていたとかの噂が、津波の後に激増したというのです。わたしは、被災地で霊的な現象が起きているというよりも、人間とは「幽霊を見るサル」なのではないかと思えます。故人への思い、無念さが「幽霊」を作り出しているのではないのでしょうか。そして、幽霊の噂というのも一種のグリーフケアなのでしょう。夢枕・心霊写真・降霊会といったものも、グリーフケアにつながります。恐山のイタコや沖縄のユタも、まさにグリーフケア文化そのものです。そして、「怪談」こそは古代から存在するグリーフケアとしての文化装置ではないかと思えます。

怪談とは、物語に力で死者の霊を慰め、魂を鎮め、死別の悲しみを癒すこと。ならば、葬儀もまったく同じ機能を持っていることに気づきます。葬儀で、そして怪談で、人類は物語によって「こころ」を守ってきたのかもしれない。

そして、最近いろいろ調べたのですが怪談というのは、だいたい日本では100年おきに流行しているのですね。100年ごとに怪談が流行していて、その頃には飢饉とか大きな震災があったようですね。大量な死者が生まれた後に、やはり死者に思いを馳せる。「死者はきつこういふことを言いたかったのではないか」、「恨みがあったのではないか」とか、それをかたちにしたのが怪談という文化かなとも思っています。そう、怪談とは慰霊と鎮魂の文学なのではないでしょうか。

怪談は、まさに今から流行するのかなというより、流行すべきであると思います。やはり、東日本大震災の犠牲者の方々の死者の声をいまからどう表現していくのかなと。葬儀においても、これから死者の想いを表現する演出というものを考えなければいけない。「演出」という言葉には嫌なイメージを抱かれる方もいるかもしれませんが、これからの葬儀においては「幽霊づくり」という演出が求められると思っています。

故人の写真を「遺影」といいますが、これも本当は幽霊づくりの一種なのです。本当はそこにいない人、死者に、生者の想いを馳せる「こころの装置」をつくっているわけですね。

いま、遺影というものをだんだん、動く写真にする、つまり動画を導入する動きがあります。さらに、どうすれば亡くなった方に想いを馳せることができるのか。そのような儀式、また、あるいは、祈りの場を提供していけるのかということ、私も日々考えて、また実践していきたいと思っています。

ありがとうございました。

○鎌田 ありがとうございました。では、鈴木さん、お願いします。

○鈴木 今日みなさまからいろいろとお話がありましたけれど、地震、津波、原発の問題と、さまざまな問題点が出てきていると思います。今日のスピーカーは皆それぞれ、どこか一番重く感じるところを中心としてお話されました。

私自身の問題はというと、別に原発に関心がないわけじゃないのですけれど、やはり一番いま関心を持っているのは、宗教者が自分の宗教の布教ではなく、超宗派、超宗教的に宗教的なケアをする構造がどうしたらできるのだろうかということです。

私自身が、とりわけ宗教民俗学というのをやっているのですが、従来宗教というのは、一言で言えば価値の問題なのです。価値、つまり、価値を認める人にとってはすごく重要だけど、価値を認めない人には全然意味がない。あるいは、自分の価値を否定されたら、それこそ相手をあやめてでも自分の価値を貫くというように、宗教はある意味非常に怖い面も持っており、人を救うのみではないいろんな側面を持っているわけです。

そうした際に、中立な立場の国立大学にいて宗教学を教えているわれわれとしては、宗

教が正しいとか正しくないというところには絶対踏み込まないで、事実としてこういうことがある、これが宗教として人間に、社会にどんな意味があるのだろうかということを教えてきました。

その僕がですね。一応、このお手元の資料の6ページには、今日の参加者がいっぱい出て来る『日経新聞』の玄侑さんの写真入りの部分がございますけど。ここら辺の、ちょっと最初の方にちょうど私の方でつくった実践宗教学寄附講座の話が出てきております。

この記事にあるようなところ、つまり、ある意味では、「いかにあるか」ということを言っているはずの宗教学者が、「いかにあるべきか」、実践宗教学を進めるにはどうあるべきかというところに一步踏み込んでしまっているのが、いまの私の現状だと思います。

そういう意味で、ちょっとここまで言ってしまうといいのだろうか、私としては思っていますので、今日みたいなこういう機会を与えていただけてみなさまの反応を見せていただけていることはすごくうれしいことと思っています。

つまり、先ほどちらっとお話ししましたように、アメリカなどでは、軍隊チャプレンとかいうようなことで、宗派を越えた兵隊が戦場で死を迎えようとするときに、違う宗教の、つまり、ムスリムの兵士が倒れているところにカトリックの神父が行って死を迎える最後の言葉をかけることをやるような、そういう現実があるようですが、日本はそういうことがまだ全然ないわけですね。

もっと言うと、日本はちょっと前から、宗教という言葉を使うこと自体が非常にナイーブになってきている。それが、神戸の震災のときには、宗教団体がいっぱいお手伝いしたにもかかわらず、その宗教団体の名前を隠してと言うとちょっと言いすぎかもしれませんが、それを表に出さずに動いたということがあり。それを、山折哲夫先生は批判して、いったい宗教者は何をやっていたんだというような流れが出たわけです。

その点で言いますと、今回はそんなことはなくて、宗教者は宗教者であることを全面に出して、いろいろケアしている部分があると思います。そして現実には、「カフェ・デ・モンク」なんかに行きますと、「お坊さん、来て、来て」というような感じで、お坊さんの姿を見ると、そこへ寄って行って話を聞いてほしいという、おばあちゃんたちがいっぱいいます。そうした感じで、宗教者が来ることを歓迎しているような部分がいっぱいあるわけです。

ですから、そういうときに、布教ではなく、超宗教、超宗派的なかたちの宗教ケアという言い方をしているのですが、それがどう実現できるか、ちょっといろいろ考えております。この辺りのことに関してご意見とか、ご批判などいろいろ頂ければと思います。

この新聞に出ていない、いろいろな方からも問い合わせが来ております。自分もやりたいという言い方をしてくださる方もおりますけれど、そのほか、自分もこういうことを考えていたと。自分とぜひ話をして、その辺を聞いてほしいという方々もいろいろいる。新聞もこういうふうな全国紙に出ると、すごいんだなというのは思いましたけれど、そういうことがあります。

今日の機会は本当にありがたいと思っていますが、皆さま方、ぜひ、いろいろ導いていただくようにご意見などを頂ければと重ねてお願い申し上げます。

ありがとうございました。

○井上 稲場先生のお話に、「丸ごと支援」というのがあったと思うのですがけれども、去年6月に南三陸町に入ったときのこと、「心のケアに関わる者ですけど、何かできることがありますか？」と聞いたら、最初、「喪服」という返事が返ってきました。ああ、喪服がないのかと。次に、「太鼓」という話が出てきて、「え、なんで太鼓なんですか？」と聞いたら、南三陸町では、50年前のチリ沖津波の後で、『津波復興太鼓』という音頭、楽曲を作って伝えてきていたそうです。

お話を聞かせてくれた太鼓隊の人によると、今回の津波の翌日、子どもが無事帰って来た姿を見て、「ああ、これで太鼓が伝えられる」と思った。「でも、肝心の太鼓が一台もないのだよ」という。だから太鼓が欲しいのだということでした。私は高野山真言宗にお願いして、9月下旬、10月ぐらいには太鼓を寄贈することができて、彼らは復興音楽祭でEXILEと共演して演奏したそうです。

最近では、先月末から7月1日にかけて、南三陸町を中心に歩いてきました。石巻から雄勝も走ってみました。今回の訪問の目的は、登米というところ、被災地支援のバックヤードになっている所ですけども、そこで「復興感謝太鼓祭」というのがありまして、太鼓隊の方がチケットを送ってくれたのです。私は、あの『津波復興太鼓』を一度聴いてみたかったです。前日は仮設住宅に泊まらせていただいて、太鼓隊の代表の方にお話を伺いました。「太鼓をもらったけど、最初、たたいていいかどうか分かんなかったの。9月、10月。でもね、実際に太鼓をたたいたら、泣けて、泣けて、涙が出たら時間が流れるようになった」そんな話を伺いました。

伝統芸能のこと、いろんな祭りのこともそうなのでしょう。やはり、その当事者の方にとっては、やってみたいけど、やることに躊躇もある。でも実際にやってみると、体を動かして、仲間と一緒に汗を流し、声を出し、それから、涙をたくさん流せるようになると、止まっていた時間も流れるようになるのです。

そして彼は、ふと、こんな言葉を漏らされました。「いま、もし東京で大震災があれば、俺たちのことは忘れられちゃうよ。いま一番怖いのはそれだ」それから、「まあ、先生も遠い所から来るのは大変かもしれないけど、たまに来てくれて、俺たちのことを忘れないでくれ。それが一番ありがたい」と言ってくださいました。

「忘れない」というのは、島藺先生が引用された宮沢賢治の言葉にありましたけれど、仏教で言えば「念」という言葉に当たります。「念」、「ワスレズ」の大切さです。

私は「津波復興音頭」を聴いて、泣けて、泣けて仕方ありませんでした。「ああ、一番聞きたかったのは私だったのかもしれない」と思いました。演奏を終えた太鼓隊のメンバ

一の手をとって、「ありがとう、今日は聴きに来てほんとうによかった」と、また泣いてしまいました。こんな感じでグリーフに主に関わっているのですけれども、これからじわじわとグリーフのボディブローが効いてくる大変な時期になってきます。草っばらになってしまった何もない跡地を見て、「悲しみは一段とまたひとしお増してくるようだ」と話してくれた被災者の方もいました。

それから、怒りの問題があります。これから自立支援住宅に移るころ、被災者の怒りが再び噴出してくる可能性が高まります。でも、怒りのマネジメントを支援することが、政治的あるいは経済的な不公平をカムフラージュすることに使われてしまうとすると、いったい何のための支援なのかということになりかねません。悲しみだとか、霊的だとか、スピリチュアルということは、いったい何なのだという事です。

仏教徒で、ベトナム人のお坊さんにティク・ナット・ハンという方がおられます。ベトナム戦争のときにエンゲージド・ブディズムを提唱しました。社会参加する仏教ということです。仏教の活動が、経済的、社会的な不公平に対しても働き掛けられるようにすることを目指して、いろいろな運動を展開してきました。

それから、ケン・ウィルバーという人は、トランスパーソナル心理学を理論的にけん引した人なのですが、彼はいまそれを超えて、インテグラル、統合心理学というものを始めました。

その理由は何かと言うと、超越したもの（トランスパーソナル）に関わることが、社会的、経済的な制度の不公平に対して働きかける力を持たねば意味がないということです。あるいは、権利という視点から見ると、目の前の人を本当に大切にすることがどういうことなのかを吟味してみる事です。個人的なレベルでトランスパーソナルに達していたとしても、社会的な不公平、暴力、戦争をもたらす制度の変革に関して何も力を持たないのだったら何なのだろうという思いを持って、統合心理学というものに進んでいったのだと思います。

ですから、私も、グリーフとか、スピリチュアルというものに関わりながら、先ほどは「悲しむ力を育む力に」という表現をしましたが、悲しむ力が育む力に変わったときに、私たちはどんな自我、あるいはどんな志を持って、どんな価値観や自然観を持って生きていく世代を育もうとしているのかを明確にしていくことが必要だと思っています。

その新しい世代が、原発開発に象徴されるような、私たちのやり残した問題に対してどのように対処してほしいのかということでもあります。玄侑先生のお話で、元請け、二次請けが4万円からだんだん8千円ぐらいまでになっていくというのがありました。そういう構造を介して、科学者の情報も操作されていく。現場でパイプをつなぐ人も、0.5ミリの基準のズレを調整できない。そういうことを放置しておくから、いろんな事故が起こる。

今回の原発事故の後で、アメリカ側の開発者の間でのいろんな議論も含めて、原発の背後にある問題も次第に明らかになってきています。原発事故の問題に関して、自然エネルギーの方向に切り替えるために必要な総合的議論を継続していける世代を育むために、悲

しむことだとか、霊的なものに関わることがどのようにつながっていくのかを明確にすること。まさに、そこを問われているような気がしています。

政治や経済の不公平、ある一部の人たちの利益をカムフラージュすることに使われてしまわないような、悲しみやスピリチュアルなものへの触れ方があるのだと思います。私たちはどんな次世代を育もうとしているのかを問われているのだとひしひしと感じます。

○鎌田 どうもありがとうございました。

最後に井上ウィマラさんが全体的なまとめの話をしてくれましたので、こころの未来研究センターの研究プロジェクトとしての姿勢を付け加えて結びとさせていただきます。

私が1,998年4月にこころの未来研究センターに入って4年が過ぎ、今年で5年目になります。私がこころの未来研究センターに所属している限り、毎年このような公開のシンポジウムを1回ずつやっていきたいと思っています。というのは、やはり一年一年どうなっていくのかということきちんと検証していくことが大事だと思うからです。またそれが研究者の一つの務めでもあると思うからです。私たちの多くは研究者ですので、いま出ているデータを踏まえて、学問的にきちんと検証しつつ議論して、社会に発信していくという責務があると思います。

それをホームページや報告書や本など、いろんなかたちで社会に提示していくことを継続していきたいと思っています。毎年7月には一般公開シンポジウム、そして、1月には半公開の研究会を開催して、宗教的世直しとは何なのかという密な議論をして、年に2回はホームページやいろんなかたちで発信していきたいと考えております。

今日壇上で発表してくれている方々は、みなさん連携研究員なので、同士とも仲間とも思っていますので、末永くお付き合いいただくと同時に、皆さまも私たちの活動の何が不足か、こういうことをしたらいいじゃないかということ、今日のアンケートでも構いませんし、こころの未来研究センターへの提案として出していただければ、それを踏まえて、これから先のことを考えていきたいと思っています。

今日、最初もほら貝で始まりましたが、ほら吹き東二としては、最後もほらをもって結ばせていただきたいと思っています。これは、私の鎮魂の気持ちと、司会が不十分だったおわびの気持ちと、皆さまがたがこれからますます自由自在に活躍していただくといい思いを三つ兼ねて、最後のほらとさせていただきます。

(ほら貝奉奏)

○鎌田 どうもありがとうございました。今日はこれをもってお開きとさせていただきます。

(終了)